

---

# 雷纏う竜（MH転生）

ヨヌフ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雷纏う竜（MH転生）

### 【Nコード】

N5443W

### 【作者名】

ヨヌフ

### 【あらすじ】

鈍いが適応力は高い主人公がドー○君モドキな神のミスで死んで、テンプレ転生でモンスターハンターのような世界へ。主人公はキリン娘達とイチャイチャできるのか……それは誰にも分からない……

不定期更新です。続けられたらいいな。

## プロローグ（前書き）

小説を書くこと自体が初めてです。ミスのご指摘ありましたら感想のほうでご連絡ください。これからよろしく願います。

## プロローグ

いきなりだが、俺こと　　はテンプレ的に転生することになった。ぬ？名前が出て来ない、まあいいか。二十歳の誕生日の前夜にメテオを喰らって俺は死んだらしい。

なぜ、死んだらしい(・・・)かと言うとメテオで即死したのもあるが、俺はお酒を飲んで寝ていたからよく分からなかったというのが大半である。最後まで知っていたら高いやつを飲んでいたので…何、フライング飲酒だと……こまけえことはいいいんだよ。

どうせ死ぬなら他のテンプレみたいにな、子供をかばうとかイイハナシダナーな感じで死にたかつたと思うのは俺だけだろうか。ちなみに死体はあとかけらも残さず消滅、半径30mが吹き飛んだらしい。地味だな。ツングスーカクラスのメテオだったらもっと派手に逝けたのに。

まあ何はともあれ転生の間(仮)である。よくある真っ白でいかにも神々しい雰囲気の中で、目の前に神と呼ばれる物がある見た目は羽の生えた白いドー○君だが。しかし、このドー○君威圧感MAXで言葉に出来ない雰囲気が出ておられる。

現在までの神との会話を並べると「君死んだよ」「はあ」「原因はボクのせいだから転生させてあげるよ」「はあ、ありがとうございませす」「その他の細かい事はそこに在るから」とグダグダだった。

その後、光る球体に触れて、死んでしまった事やその後、何が起きたか。夢じゃありませんよ残念ながらなどを知ることが出来た。最

後は分かりたくなかったでござる。

そして冒頭に戻るが転生だ。どうしこうなったかは分かったがこの後は何かチートな能力をもらって俺TUEEEでもしたり、ハーレムでもつくって淫靡で退廃的な生活を送ったほうがいいんだろうか

……

「どうしてこうなったかが分かったなら転生先を言うね」

あ、OKですよ。

「モンスターハンターのような世界に行ってもらおうよ」

モンハンのような世界とな、まあようになってところが気になるが、大筋は変わらないだろう。遊んだのは2と2ndと2ndGだけが、その他についてもうる覚え程度には知っているから情報チートが出るかもしれない？ まあ、最近、やってないから2とかもう覚えだが。と言うか選択権は無いのね。なの○とかネギとか禁書のようなヒロインがいる作品が良かった。モンハン世界には、お茶漬けやカレーなどの好物があるかどうか不安だし。

「最後に君の願いを3つかなえてあげよう」

む、いよいよチート選択の時が来てしまったか……。ここは定番の王の財宝や幻想殺し、一世界《ザ・ワールド》、魔力無限とかか？ いやまて、王の財宝や世界はともかく幻想殺しと魔力無限は役に立たない気がするぜ。それにギルドナイツっていう怖い人たちがいたから。特殊能力系はまずいか暗殺怖いツス……。なら、ちよつとした前世？の願いでもかなえてもらうか。

「じゃあ、ある程度強い体と、願い事二つ分でこれからは優しくしてください」

こんな願いをいった理由は、前世？の俺はプチ不運だったのだ。地味に何回か鳥の糞は当たるは、おみくじで中吉がでて内容そんなに良くないは、ポケモンずっとやってきて野生で捕まえた色違いは○タチだけだったりしたのだ（赤い○ヤラドスは除く）。けど、神様のミスのメテオで死んだから、もう、プチ不運じゃないのかな？メガ不運？

「変則的だけどいいよ君の願い確かに確認したよ」

よしや！俺、あつちで生まれ変わったらキリン娘やナルガ娘とイチヤイチヤするんだ……ついでに、アツアツのピツツアも食いてえ！ナラの木の薪で焼いた故郷の本物のマルガリータだ！ボルチーニ茸ものつけてもらおう！そんなピツツアで大丈夫か。大丈夫だ、問題ない。ふむ、こんな感じかなでは送ってくださいな。

「いつてらっしやい」

ラストにいいい！こんな神様のいる部屋にいられるか俺は一人で転生するっ！！

## ブログ（後書き）

最後はふざけすぎたかな（汗）  
ちょっと胃が痛いです。こ読了ありがとっございました。

第一話 〱ジンオウガかと思っただか、俺だよ〱(前書き)

よく分かる前回の話

主人公寝てる間にメテオ喰らう  
神と名乗るホワイトドール〇現る  
モンハン世界にテンプレ転生



## 第一話 くジンオウガかと思ったか、俺だよ

さて、前回俺は、見事に産まれる前から死亡フラグを立てつつ転生と言う高難易度なウルトラC級の技を披露、見事脳内オリンピックで優勝し文句なしの金メダルを手に入れることができたわけなのだが。今、現在の俺の状況を伝えると。

狭いです

いやどのくらい狭いかって言うと、マジ狭い、腕一本足一本どころか指一本すら動かせない感じ、しかも周りもやばい硬い凄く硬い、恐らく産まれたばかりであろうこの赤ちゃん肌だと思っ張りで傷付く事は確定的に明らかである。

まったく、こんな薄暗くて暗くて狭いところにベイビーな俺を置いとくなんてトラとウマさんが悪魔合体して ワガナハ トラウマ コンゴトモヨロシク なかんじになってしまったらどうするんだ。ちなみに、現在意識が目覚めてからざっと6時間程度である。この間狭い場所にずっとうつぶせ状態で穴にジャストフィットし続けている。これ、神に強い体もらってなきや死んでんじゃねえか？死んでるよね。まあ少なくとも産まれたばかりであろう赤ん坊にする所業ではないなこれは。強い体チートもらってよかったと思う今日の頃である。

しかし、このチートな体にも限界はあるのかそろそろ意識がやばい。まずこの状況で6時間は精神的にも結構くるものがある。ただでさえ神だ、死んだだ、メテオだ、テンプレ転生でモンハン世界だとで疲れている身だというのに。そして肉体的にはアムハングリーと腹がへつてしょうがない。だっってお腹がへっちゃう赤ん坊だもん状態である。

さてこのままいくとマズイ気がする。現在、ミッション【穴からの脱出】を敢行中だ。必死に体をくねらせて全力前進する。こんな運動をベイビーがすれば疲れると思うが神様印の強い肉体だからかなんともない。

そうやってくねと、ゲシユタルト崩壊しそうなほどくねくねすること1時間半。無事脱出成功することが出来た。効果音をつけるとスポーンと飛び出した。途中あきらめかけたり、もう…ゴールしてもいいよね。となったときは某テニスプレイヤーを思い出して頑張りましたよ。ネバーギブアップの精神で富士山とお米と蜆の力だ。脱出時少し落下したが気にしない。今はこの感動を誰かと分かち合いたい。

だがそれも無理なようだ。くねくねしすぎた為なのかは分からんが腹がさらにへってしまったって、意識が朦朧としている。原作でいうならスタミナ5位かな。餓狼のスキルが無いので俺には何のメリットも無いがな。脳が至急、栄養補給を要求すると五月蠅い。このまま俺は息絶えてしまうのか。やはり死亡フラグを立てすぎたか……

そう思った時。ポトツと隣に何か落ちる音がした。同時にソレが食べそうな匂いを発している事を俺の鋭敏な嗅覚が捕らえた。その瞬間絶食を強いられていたケモノの如くソレに飛び掛った俺は、ソレが何であるかもかまわず噛み付いた。当然噛み付かれたソレは必死に抵抗し暴れまわった。しか、俺はその生き物より少しではあったが大きくそして力強かったため、押さえつけることができた。そのまま何度も何度も赤い血が噴出さなくなると、その生き物の赤い肌に噛み付き最後にギュツと断末魔の鳴き声をあげた生き物を俺は貪り食った。

さて食糧事情はとりあえず解決したしさつきから目を背けていた俺の体について考えるか。まず腕一本足一本どころか指一本すら動かせない感じ、といったがまず俺の体には腕？が2本しかない。次にくねくねしていたが人間自体にあのくねくね感を出せない。最後に人間の赤ん坊は体全体で跳躍したり柔らかいといえど肉を食いちぎったり出来ない筈だ。そんな奴居たら怖いわ。チャッオーがいたよ。そして目の前の水晶に映る俺の姿を見ると丸い口に並んだ小さいながらも鋭い歯、短い腕のようなもの、ところどころ血で赤く染まっている。ピンク色のヒルのような体。

ギギギに似ているが俺には判る。こいつはフルフルベビーだ。

ってなんじゃこりゃあああああ！いや、確かにモンスターは普通に強い体だけれどもフルフルって、神よなんてチョイスをしてくれたんだ。一応飛竜の赤ちゃんだけれども！アイテム扱いのキャラが子供時代のフルフルにしないでいいではないですか。どうせ飛竜ならオレウスとかディアブロスとか格好いいのが良かったです。それじゃなくてもイヤンクックとか。

なぜにフルフルを選んだんだ。神よ……しかもピンクって新しい亜種ですかコンチクショ！。なんかもう、子供には見せられない体になつてるじゃねーか。大人になつた瞬間、R-18指定になつて、<sup>ギルドナイツ</sup>警察のお世話になるじゃねーか。せめて白になれ白になれ白になれ白になれ白になれもし変われるのなら白になれ……。おお、白になった。やってみるもんだな、念じれば通ずるとはこの事か……

さて今日は驚き過ぎて疲れた。どっかモンスターが少ない所に穴を掘って隠れて寝るかな。

第一話 〱ジンオウガかと思っただか、俺だよ〱（後書き）

喰った物

・フルフルベビー亜種

神の優しさ

・普通に強い人の体より強いフルフルの体・腹が減ったときに落ちてきた餌（空腹は最高のスパイス）・フルフルなのに目が見える・喰った物で強くなれる力

## 第二話〜もつとがんばりましょ〜（前書き）

この話を書く前にフルフルについて調べました。

フルフルベビーって他の生物に寄生して成長して産まれたときは手足がないんだってさ……

このフルフルベビーは特別な訓練を受けています。

## 第二話くもつとがんばりましょう

一晩寝たら落ち着きました。主人公こと現在フルフルベビーな俺です。起きてからこれからの予定を考えていると気づいたんだが、俺は今眼が見えている。当たり前だと言う人も居るかもしれないが、うる覚えになるがフルフルと言う生き物は、目が見えないもしくは視力がほとんど無いという設定だった筈。

つまりその子供であるフルフルベビーも同じくらい目が見えない筈なのに、俺はこの薄暗い洞窟の中はつきりと物が見える。やたら高性能な目だな。これは俺の願いである強い肉体が関係しているのだろうか？目が見えるのはいいことだが閃光玉とか食らっちゃわないのだろうか。

なにはともあれ俺はこれからの生き方を決めていこうと思う。とりあえずは喰われない程度には強くなる。二回目の人生少なくとも100まで楽しみたい。うる覚えのフルフルの生態的に産まれた後しばらくが山場だと思っただが合ってるかな。

次に長期的目標だ。モンスターハンターの世界といえば古塔や太古の塊、所々にある遺跡など古代文明があったことを匂わす雰囲気があったり。赤衣の男や白いドレスの少女のような謎の人物が古龍のクエストの依頼人に居るなど、ちよつとした想像の翼を広げゴジマ粒子の海に飛び込みたくなるようなさまざまな設定を想起させられる単語が其処彼処にちりばめられていた。

そこから考えられる今俺が一番そうで有ってほしいと思う設定は、ミラ系統は人型になれるまたは人と意思疎通ができるという事だ。これはさっき言った赤衣の男関連の単語やミラルーツのクエストの依頼文から推察することができる設定だ。つまり飛竜の俺でも頑張

ればまた人の形をとることが出来る可能性があるということだ！  
まあ、飛竜と古龍には隔絶たる違いがあるらしいので超低確率だろうがな。しかし俺は諦めん。いつかキリン娘とイチヤイチャするとう目標だけは曲げられんのだ。俺が死ぬとしたらそれはキリン娘に討伐される時だろう。

話が少し逸れたが長期目標は人型になるために力と知恵をつけていく事である。おそらく人型になるためには高い知性と強い力が必要であろうから。その点、転生した俺は知性は初期から人間の知性搭載、力は神様印の強い体がある。それに神様に優しさをお願いしたからさっきの妄想設定もこの世界ではあるだろうから俺が人型になれる確率もそう低くは無いだろう。

さて目標も決まったこと事だし、今の俺に出来ることは人型目指してすこしずつ力を蓄えていくことである。つまり、食事をする事だ。よく食べよく寝てよく育つこれは大体の生き物に通じる。

人生の目標を決めた俺は今、食事をしている。いったい何を食っているのかというと。

虫を食っている。

こうノソリノソリと動きながら動きの遅いやつを自慢の口を大きく開けて喰ったり、待ち伏せしてから体全体を使った跳躍で少し大きな虫をパキリクシャリと音を鳴らして飲み込んだりしている。

もうちょっとマシな物喰えと言う人も居るかもしれないが。現在の俺ではリスクが高すぎる。この世界は弱肉強食なのだ。モスならやれるかも知れないが道中で天に召されてしまうだろう。

それに、意外と虫って美味しいというのが俺の前世からの考えだ、

ほら、イナゴの佃煮とかはちのこぐらいなら皆も食べたことあるよね、……ないのか残念。蜘蛛とかちよつと食べてみたくなるのは俺だけだったのか……

まあさすがに毒っぽいことや、極端に気持ち悪い見た目の奴はスルーしているがな、Gとか。そんなこんなで次で食べた虫さん300匹目だ。しかしこの体は食べても太らないというか、食べた分だけ成長しているというか、不思議な体だ。すでに目覚めた時よりか大きさが1.5倍ほどにはなっていると思う。満腹とかになるのだろうかこの体。しかしこの大きさなら奴をしとめることが出来るかもしれないな。

というわけで移動してきました。その奴の所に。正直に言えば奴とはさつき見かけた、傷付いて洞窟に隠れにきたケルビさん（ ）である。弱ってる生き物を狙うのはちよつと嫌な気分になるが悲しいけど、これ自然界の掟なのよねということで勘弁してもらおう。

さて現在地はケルビが傷付き横たわっている所、その真上である。フルフル特有の吸盤もどきを、フルフルベビーである俺は両腕に持っている。それを利用して俺は天井にへばりついているのだ。勝負は一瞬で決めなければいけない。逃げられたら俺では追いつけないのだよ。故に此処は一撃必殺、暗殺上等のスタイルをとっている。今は対象が気を緩めるのを待ちつつ準備をしている、気を緩めたその時が奴の最後だ……

首を動かし周囲を警戒していたケルビが首を下ろし瞬間、俺は上から飛び掛かると同時に溜めていた唾液を吐き出した。俺の唾液を浴びたケルビは、俺をはね飛ばすほど暴れ回りすぐに動かなくなった。

……ってオイおかしいぞ。俺の予定だと唾液は牽制、良くて目潰し



だったのに、まさか唾液だけで死ぬとは。これも強い肉体の力なのか予想外すぎるぞ……  
とりあえず。いろいろ集まってくる前にいただきます。

第二話くもつとがんばりましょつく（後書き）

神の優しさ

・ 傷付いたメスのケルビのそばにオスのケルビがいなかった事・猛毒の虫を食べなかつた e t c

産まれたばかりなので神の加護が多目です。

第三話〜チャレンジ精神を持ちなさい〜(前書き)

いつもよりちょっと長いです。

タイトル通りの主人公ですがよろしくお願いします。

### 第三話くチャレンジ精神を持ちなさいく

初めてケルビを仕留めた日から一週間、目が覚めると俺はフルフル（成体）になっていた。

「キョアアアア！！！（よっしゃあああ！！！！）」

おっと、思わず叫んでしまった。無駄な叫びは敵を寄せ付けるだけだと学習したのに。だが仕方ない、成体になった喜びは受験に合格した時の喜び以上だったからな。今なら何でも出来そうな気がする。しかし、成体になることが出来たのはいいが。

「キユウウ（まだ、ちっさいな）」

あれからケルビも九頭、モスも三匹食べたのに俺の体はそこまで大きくならなかった。成体になった今も、大き目に見ても精々メスのケルビくらいである。

どうやらこの体は食べても大きさの変化は少ない代わりに肉体の質や性能が上がりやすいようだ。

実際俺がこの一週間確かめたこの肉体の性能は小さいながらも凄まじいものがあった。

まず、一週間前の予想外の結果の原因である。異常な威力を誇った俺の唾液についてだが。常時あんなものが出ていると、将来キリン娘といちゃつく時に邪魔になるので必死に研究した。それはもう干からびるほどに研究した。

その結果俺の唾液は自分の意思で溶かす力が変わる事が分かった。あの時は初のまともな獲物をハントする緊張と興奮で、その時の最

大威力の唾液になっていたのだろう。将来的には服だけ溶かせる魔法の唾液をだせるようになりたい！これは誰もが夢見ることだ！浪漫砲とはまた違う漢の浪漫だ！

また唾液研究には副産物も有った。それは唾液の粘度と電撃だ。

唾液の粘度の方は、溶かす力の研究中にたまたまデローンとしたのが出たからイロイロ試してみた。

粘度を薄めた結果できた異常にサラサラした唾液は、何時役に立つかは分からない代物だった。

しかし、粘度を高めたやつはクモの糸みたいになったのでクモの巣モドキを作つてケルビや虫達を搦め捕ったり、口からカエルの舌の如く飛ばしてケルビに引つ付け必〇仕事人の様に天井に引つ張り上げたりと大活躍している。

電撃は唾液を飛ばそうとしたらなんか出てきてしまった。あの時はかなりビツクリした。本ツツツ当に驚いた。その後、電撃ブレスを何度か吐いた後電気の扱い方が解り帯電攻撃にも成功した。

ただその時は出力不足らしくブレスも一つだけであり、帯電も長続きしなかった。

電撃に関しては威力は強くなれば勝手に上がるから常盤台のビリビリ娘並の精密制御が出来るようになりたい。

……決して、決つっつして人様にお見せできないような、ピンクな使い方が出来るようになるためではない。ないっつたらない。純粹な Level 15 クラスの電撃エレクトロマスター使いになるため挑戦である。

次に肉体の基本性能だが、フルベビのくせして先程出ていたように自分より大きいケルビを持ち上げる筋力や、体のバネを利用して地

面から天井まで跳び上がれる瞬発力、調子に乗って地面と天井の間を高速で跳び回っても息一つ乱さない持久力と本当にフルベビか？と思われる程のハイスペックだを持っていた。

ついでに、地面と天井を跳び回っているとき、わざと水中に飛び込んで泳げる事も確認しそのままアロワナや金魚みたいな魚以外を二、三匹食べた後華麗に水面から飛び出した。

……アロワナ系を避けた理由は食べた物が爆発して死ぬとか流石に嫌過ぎるからである。バクレツアロワナ怖い。

この様に、フルベビの時点で凄まじい力を持った俺が成体になったのだ。となれば、俺が次に喰らうべき獲物は決まっている。

「ギョア（イーオスやブルファンゴ達だ）」

俺はビビリではない慎重かつ警戒心が高いただけなのだ。

まずイーオスを探しに出かけたのだが、その道中運の良いことに、メイドイン俺のクモの巣トラップに引っ掛かっているブルファンゴに出会った。フゴフゴ言っていたので遠距離から電撃責めで動きを止め生きたまま美味しく戴いた。

ケルビやモスに比べ筋っぽい肉だがその歯ごたえがクセにな「フゴアアアア」五月蠅い。バチンッ。

新鮮さが楽しめるが、欠点は暴れたりうるさくなる度に電撃を流さなきゃ駄目な事だけだな。

……あ、動かなくなった。強すぎたか？まだ、半分しか喰ってないのじ。

ところでブルファンゴが苦もなく喰えたのはラッキーだが、俺の今

日の目標は成体になったことで正面から何処まで戦えるか確かめる事だったので、今回のこの無抵抗の捕獲は若干不本意であった。

よって今、俺がイーオス達に囲まれているのは計画通りでありうっかりしていた訳ではない。

ブルファンゴを生きのまま食べることで血を飛び散らせて、その臭いで呼び寄せたのだ。

現在は威嚇しながらの睨み合いの最中だ。沢山集まって威圧感やバイとビビってたりなんかしていない。

イーオス達も俺にビビっているらしく、かかってこないのだから仕掛けることにした。

喰らえ！俺の今編み出したばかりの必殺技！電磁ネットver致死！

俺は網状にした唾液を素早く放ち、八匹のイーオスをまとめて捕らえると今放てる最大の電撃で行動不能にした。

「「「「「ギアアアツ!? ギゴヤアアアアアアツ!!!」「」「」

説明しよう！電磁ネットとは粘性を高めた唾液を投網の様に吐き出し相手の動きを止め、其処から唾液に電撃を通す鬼畜コンボである。ver致死は最大威力の電撃と唾液で放つverであり、他にも色々なverがを作る予定である。

その結果だがうむ、これは酷い。具体的には初撃の唾液をもろに被り頭が溶けて胴体しか残ってないのが三匹で。残りは唾液で全身焼け爛れていたところに電撃を喰らって上手に焼けてしまっている。

八匹のイーオスを仕留めた俺は過去を振り返らず一気に群れの半分

を小さなフルフルに倒されて動揺している、残りの八匹のイーオス達に立ち向かった。

まず一番近くにいた奴の足目掛けて首を伸ばして噛み付き、そのまま自分ごと天井に連れて行く。天井に尻尾の口でぶら下がった俺は首を伸ばした状態でイーオスを振り回し下にいたイーオス達をなぎ払った。そのまま振り回したイーオスの頭を壁に叩き付けて砕き、地面に降りるとこの時点で戦えるイーオスは五匹残っていた。

その後は、生き残っていてもフラフラのイーオス達に、突進を仕掛け吹っ飛ばしていく単調な作業だった。そのためこの戦いでは自分の斬撃に対する防御力は確かめられなかったのが残念である。打撃系に関しては壁に思いつきりぶつかっていたが傷一つ付かなかつたので大丈夫なのは判っているんだが。いつそ何かの爪で自分の体引つかくとか、自分で噛んでみるとかしょうかな。

雑魚相手ならこの体は歯牙にもかけないことを確かめることができた俺は、この一週間で作った巣にこんがり焼けた獲物達を持ち帰った。



### 第三話くチャレンジ精神を持ちなさいく（後書き）

ツツコミが来る前に一つ、イーオスは体内に分解酵素があり、本来、巣に持ち帰れないのですが電撃で丸焦げにされたので壊れました。あと、この主人公はイーオスもファンゴもフルベビの時点で本気の体当たり（ボウガンの弾と同じくらいの速さ）をすれば貫通して殺せます。

神の優しさ

特に無し

手に入れた獲物

イーオス八頭

ブルファンゴ一頭

## 第四話〜ようこそ、男の世界へ〜（前書き）

途中、無理やりな場所がありますが気にしないでください。

## 第四話くようこそ、男の世界へく

巢に帰った俺は焼きイーオスの尻尾をかじりながら現在の能力について思考していた。

ちなみに、この巢は洞窟の隅の壁の割れ目から広げたもので、唾液の研究ついでに作り初め今では一辺が三メートルの立方体の大きな部屋になっている。手入れは毎日しているが溶かして作っているの、壁はドロドロした感じで固まっている。肌触りは良いんだが、見た目がちよつと悪い。

出入り口はさっきの洞窟の壁の割れ目に通じる俺より少し大きめの穴が一つ。部屋内の池と洞窟内の池を繋ぐ大きな穴が一つである。

池は地下通路を作ろうとしたら外の池と繋がってしまったので、水中の出入り口兼魚捕りの場になっている。

寝る時には出入り口はクモの巣状の唾液で塞ぐので外敵は入ってこれず安心して寝ている。

なお現在、小部屋二つと食糧貯蔵庫を制作予定である。いつ食料がなくなるかわからないからな。

話を戻すが俺の体についてだが、形は変わっていたが肉体の性能は基本的には劇的な変化は無かった。

しかし足が生えた事により移動しやすくなり機動力がかなりあがった。

さらにイーオスを振り回した時気付いたが首がすごく伸びた。巢に戻って確かめたら伸ばした状態でも自由自在に動かせて尻尾も試してみたら同じ様に動かせた。

例外的に劇的に上がったのが実感出来たのが電撃能力と唾液生産能力だ。

発電能力の方は感覚的にだが以前の数倍の出力と数十倍の発電力になっていて。何十発でもブレスを撃てる気がする。帯電時間も延びている。

唾液は粘度や溶かす力はそこまで変わらないが量がおかしく、明らかに俺の体の体積以上に出ている。食べても体が大きくなるなら事と言ひ俺の腹の中には四次元空間でもあるのだろうか？

さてスペック確認も終わりこの体の強さも分かった。これ以上ちまちまとやってもいいのだが早目に強くなって、行動範囲を広げないと人に会うまでに俺の人としての考えがいつか磨耗してしまう恐れがあるので、これからは積極的にポジティブに行こうと思う。

その後イーオス達を食べ終わった俺は思い立ったらすぐ行動に移さないと、ダラダラしてしまうのを前世で十二分に学習していたので早速行動に移した。

具体的には洞窟から初めて外に出た。巣から出てのそのそと洞窟の外に出た俺を待っていたのはどんよりとした分厚い雲がかかっている空。淀んでいる湿ったいやな匂いのする空気。毒々しい色を持ち危険な色をしている沼。所々に生えているさまざま種類のキノコ達だった。

出てきた生物から判ってはいたがやっぱり沼地かとなると出てくるの手強いのはゲリヨス、ドスファンゴ、シヨウゲンギザミ、グラビモスが主かなさすがにグラビモスとシヨウゲンギザミはまだきついから、あつたら逃げるとしてドスファンゴは電撃でゲリヨスは噛み付きと唾液で溶かせばいけるかな。

じゃあ、ドスファンゴでも探しに行こうと俺は翼をバサツと広げ大空へ飛び立った。

ドサツ ……三秒後、俺は墜落した。

結構痛かった。落ちるときには前世からの走馬灯が見えた。そして初めて怪我をした。初の怪我の原因が墜落って我ながらどうなのよと思う。怪我自体は数秒で治ったが。

やはり空を飛ぶのは他のと比べて難しいな飛び立ったって言っても、実際は脚力を使ってピョンと跳び上がっただけだし。まあ初飛行だったし、後フルフルは飛行が得意じゃないから仕方ない。これは要練習だな俺は大空を自由に飛びまわりたい。人の夢としてこれも外せないだろう。

飛ぶことはとりあえず諦め先ほど凄まじい跳躍力を見せた自慢の足で俺は匂いを辿りドスファンゴを探し始めた。木がない開けた場所にたどり着いた俺は小柄ながら異様な雰囲気を持つ赤毛のドスファンゴに出会った。

その時、ドスファンゴと目と目が合った。その瞬間ビビッと俺達の間にかが通じた。

恐らく、これは運命なのだろう俺達の間言葉は要らない、そうだろう？俺は彼に対してそんな意味もこめて首を縦に動かすとドスファンゴも同じ気持ちなのか彼も首を動かし、そして互いになり声も立てずに距離をとった。

さてどちらの突進のほうが上か勝負しようじゃないか、カウンタ



痛みが全身を走った。特に翼と胴体の翼の付け根に近い牙で挟られた部分が酷く痛む。

しかし勝ったのは俺だった。激突の瞬間。最大限のダメージを与えるために首を伸ばしそれが奴の強靱な皮膚を破り、骨を砕き、その奥にある凄まじい生命力をもつ奴の心臓を貫いていた。俺は逝ってしまった漢に黙禱を捧げた後、死して尚凄まじい威圧感を放つドスファンゴの体を食べて自らの糧にしていった。

#### 第四話くようこそ、男の世界へく（後書き）

主人公は外に出たのと墜落したので少しハイになっております。

神の優しさ

ドスファンゴカスタム

特徴、通常のドスファンゴより強い、この辺りの主、大きさ的には普通だが、ゲリヨスを突進で吹き飛ばし、グラビモス相手に力比べできる。漢である



## 第五話〜キングクリームソー〜(前書き)

そろそろ、人間を登場させないと、「」の出番がなくなるのでキングリです。しかたないね。

10月1日 狂気をプラス

10月2日 寝不足時のテンションの怖さを知る。ルイズテンプレ  
削除

## 第五話〜キングクリームソーダ

この沼地において最も激しい戦いと伝えられるあのドスファンゴとの決闘から約五年……

俺はあのドスファンゴを初めとしてラオシャンロンやミラボレアス、ラヴィエンテなど強力なモンスター達との激闘を制し。捕食し。力をつけ。ついに念願の人間の体を手に入れ。今ではキリン娘達でハーレムを作って毎日がウハウハです。これも全てマカ漬けの壺を買ってから運が向き始めたんです。マカ漬けの壺の効果で人生（？）最高の気分です。やったね！マカ漬けの壺購入の際はこちらまでお電話くださいTELxxxxx-

俺は登り始めたばかりなんだ。この果てしないハーレムリア充坂をな…… 雷纏う竜 完！！

……まあ、俺の妄想なんですけどね。実際に五年は経ったんだが。最近はやほど腹が減ってないか危害を加えてこない限りわざわざ強い奴を食べなくなつた。二年ぐらい前までは見かけたら強い奴を食べていたんだが。そんなに食べてもまったく体が大きくなるのに俺は深い悲しみに包まれて裏世界に行きたくなつたので、力を蓄えて人化するのほとんど諦めている。もちろん攻撃を加えてくる奴は美味しくいただいているが。

代わりにこのちっさいボディを活かして、村のマスコットもしくはオトモフルフルポジションを狙おうと考えている。大きかったら気持ち悪くても小さかったらキモ可愛いかわいといってくれる女性もいるだろう。野郎は知らん！野郎に擦り寄られても気持ち悪いだけだ。

まあそうして通りすがりのハンターや商人、旅人のピンチを助けそのままマスコットポジションに入ろう作戦〜できれば美人な女の人がいいなあ〜を発動してから二年こちら一体に人の匂いがしたことは五回位しかない。しかしどれも死ぬ寸前。もしくは死んでモンスターに食われた人たちであった。一応、装備品やアイテムは巢に持ち帰り、遺体は埋めておいて簡素だが墓を作っておいた。この世界の風習はよくわからんが土葬にしておいた。

ここいら周辺を調べてみた結果、どうやらこの沼地は交易の道の近くにあるようでたまに沼地から抜け出たモンスターが取り掛かった人を沼地まで追いたててくるようだ。

しかし、そんなことがあるのにギルドは何をしているんだろうか？この五年間、一人も沼地に狩りに来るハンターがいないのだ。美人さんだったら全力で狩りの手伝いをするのに……そしてアイルーに通訳できたら通訳してもらって、転生後初の人間との会話を楽しもう。やっぱり一言目は「報酬はパンツ一枚でいい」か「なますてー」かな。

そういえばこの沼地には何故かアイルーやメラルーが居ない。居たらあのモフモフや可愛さで俺の心も癒されたのたのに。モンハン界の貴重な癒し成分が無いなんて、なんて辛い沼地だ。

だが、現実には居たのはシウグンギザミやグラビモス、アクラ・ジエビアなどの強力な生き物ばかりである。こいつらの内群れのボスの三匹は本当に強くシウグンギザミはその鋭いツメで俺の体を切り刻み、翼を切り落としてきたりしてくるし。グラビモスは熱線で俺の体を丸焦げにしてタックルで吹っ飛ばすし。アクラ・ジエビア

は爪と尻尾のコンボや水晶爆破も使ってきた。もしかしたらやたら強いこいつ等が人が来ない原因かと思いついて倒してみたのだが。それから一年経っても誰も来なかった。頑張ったのに……

しかし最近になって交易道の近くにある山間に人の気配が増えてきている。上空から確認してみると様々な資材が運ばれてきているので、中間地点に村でも作るのではないかと俺は予測している。

そして今日巢から出てみると久々に生きている複数の人間の匂いがあった。しかも人間の血の匂いが混ざっていないので、これは期待できると俺は心躍らせてつつ巢から飛び立った。

……流石に五年も経ったら飛べるよ。

こちら、スオーク。目標を発見した。

空を飛んでいた俺は人の匂いの強くなった辺りで見つからないように慎重に地面に降りたところ六人の集団を発見した。現在この五年間で培ったスニーク技術を發揮してその六人を見守っている。見たところ学者さんが二人。残りがハンター達だろうと思われる。地形かなんかの調査かな？

何故か全員マスクをしているので見た目では違いは殆ど判らないが俺の嗅覚によると学者は五十代前半の男性と二十代前半の女性だが女性の方は竜人族かな？匂いが違う。後美人っぽい匂いがする。わくわくしてきた。

ハンターはランスが二十代後半男。大剣が二十台半ば男。ボウガンが四十代前半男。片手剣が十代半ばの少女（こっちは可愛い系の匂い）だな。動きを見るに、ボウガンの壮年の男が一番強い雰囲気がある。ランスと大剣もなかなかだが片手剣の少女だけはさっきから

無駄にきよるきよるしてるので、まだ初心者または沼地は初。だろうか。恐らく依頼人一人だけ女性と言うのを避けたかったのだろう。ついでにボウガンの壮年の男と片手剣の少女は同じ匂いが混じっているのおそらく一緒に住んでる親子だろう。親子じゃなかったらボウガンの男が勝ち組過ぎるので親子じゃ無い可能性は排除しておく。もしそうだったのなら。本当にそうだったのなら俺は、初めて憎しみで人を殺す！！

しかし折角生きた人が来たのになかなかピンチにならん。モンスターが襲い掛かってきてもボウガンの狙撃で死んでるし。抜けた奴は大剣が真つ二つにしているかランスで貫かれている。片手剣の少女は学者さんの傍で周囲を常に警戒してつポーチにすぐ手が伸びるようにしている。実質的な最終防衛ラインであるランスにたどり着いたモンスターは今のところ二体のイーオスだけだ。……お前らもつと頑張れよ。ピンチになったところを助けないと怪物モンスターさんは英雄ヒーローにはなれないんだから。

そうこうしている内に奴らは特に損害が無いまま俺の巣がある洞窟までたどり着いた。むう全員思ったよりやるなあ。ボウガンの走ってくるイーオスの頭を正確に打ち抜く異常な狙撃力はともかく、大剣もボウガンとのコンビネーションと体重をのせた一撃があるし、ランスも広い視野で撃ちもらしのモンスターを的確にさばってる。片手剣の少女も父親譲りであろう視力で隠れて近づいてきたイーオスやカンタロスを撃破していた。

そろそろ昼になるがこいつら強いから見守るのやめよーかなと不貞腐れている。洞窟の中で何かしていた学者さん達がハンター達と何か相談を始めた。そのとき地面が揺れたかと思うと彼らの近くの地面からシヨウグンギザミが現れた。

男ハンター×三はすぐさま、戦えない学者さん達を洞窟の中に逃げ込ませ、その護衛を片手剣の少女にまかせて自分達はシヨウグンノギザミの気を引くために戦闘を始めた。

さてここで俺はどうすべきか。

？洞窟内にも危険があるかもしれないので学者達と片手剣の少女を追う。

？シヨウグンギザミと戦っている三人の手助けをする。

？見捨てる。

？男ハンター達をシヨウグンギザミ共々殲滅し、その後、学者男の命を人質に取り。堕ちる美人学者と美少女ハンター凌辱と肉欲の宴あな貴竜あなたって本当に最低の屑だわっを開催しようと鬼畜外道モードに入る。

？イケメンで天才のフルフルはいきなり人化できるようになりハーレムを築く。

まず？は除外するとして、？も無いなこれまで一応見守ってきたし。？は時間はかかるがシヨウグンギザミだったらこの三人なら特に怪我也無く終わらせるだろうから、無駄な手助けどころか邪魔になるかもしれない。？は大変、魅力的だが会話できないので人質交渉がうまく行きそうにないし凌辱は好きだけど実際にやるのはちよつと遠慮したい。というわけで。

「ギユウ（やつぱり？だな）」

てなわけで行ってきました洞窟内男ハンターズに見つかからないように、巢と外が直接つながっている場所から入ってきました。現在の学者さん達と片手剣の少女長いから少女でいつか、は薄暗い洞窟の

中松明で視界を確保しつつ周囲を警戒中です。そんな中でも学者さんはなんか作業しています。だが学者さんよあまりこの洞窟を舐めないほうがいいぞ。

少女が気づいたときにはすでに遅く。天井を影に隠れながら歩いてきたランゴスタやカンタロス達に囲まれていた。少女は閃光玉を投げて入り口の方に逃げ出そうとしたが投げた閃光玉をランゴスタが包むように妨害したので思ったような効果は上げられなかったらしい。入り口の方は固められ奥に進む方は開けられていたので戦えない学者が二人もいる彼らは奥の方へ追い立てられていった。

まあそつちにはグラビモスとババコンガとコンガ達がいるんですけどね。少女と学者さん達はなんか呆然としている。後門の虫地獄、前門に重戦車と装甲車、歩兵中隊付き、みたいなもんだからね。

……お、少女がグラビモスとババコンガ、コンガ中隊の気を引いてその隙に横を学者さん達に横を通らせるつもりらしいね。がんばれ！。……飛竜応援中……

あ、まずいグラビームがくる。

少女の危機を察したので、すぐさま天井から少女とグラビモスの間に降りた俺は文字通り翼を広げ熱線をから少女を守った。それと同時に尻尾の口でブレス（唾液と電撃の合わせ技）を吐いてランゴスタ達を蹴散らした。その後グラビモスの熱線と同時に少女に突進してきたババコンガを伸ばした尻尾の口を大きく広げそのまま一呑みにした。うまい、もう一頭！ボスを一呑みにされたコンガ達は急いで逃げ出している。まだババコンガは生きているのに非情な奴らだな！全く。まあ結果的にはほぼ一掃出来た。

これは決まったな。……ってなんか少女と男学者は気絶しとるがな。何でやねん。せつかくの見せ場だったのに、思わずエセっばい関西弁が出てしまったじゃないか。女学者さんは気絶してないのにハンターの癖に情けないな少女め。けど女学者さんもこれ以上は耐え切れないという感じの匂いが出ている。なんでかな。

その後、俺が逃げ出そうとしたグラビモスを伸ばした首で貫くと同じ時に誰かが倒れる音がした。何故だ。



## 第五話〜キングクリムゾン〜（後書き）

小話

人やアイルーメラルーが居なかったのは、沼地一体に成長を促す代わりに耐えられないものは死ぬ人体に有害な特殊な毒ガスがあったから、彼等は村を作るのでこの沼地の毒ガスの分布調査にきていた。

神の優しさ

素晴らしきシヨウゲンギザミ

爪を振るだけで遠くの岩やファンゴが真っ二つになる。斬撃に弱いフルフルの翼を切り落とすなどしていたが、翼が無くなった分小さくなったのを利用してヤドに飛び込みMAXの電撃でつば焼きにした。

移動要塞グラビモス

普通のグラビモスの二倍以上の巨体を誇る。その大きさと電撃や生半可な攻撃は通じず。そのパワーで吹き飛ばした後、熱線で追い討ちをかける戦い方でフルフルを苦しめた。最後は二週間かけて作った硫酸落とし穴に落とし、甲殻を溶かしてから体内を喰い破りKOした。

ぼくのかんがえたかつこいいアクラ・ジェビア

前の二体と比べてそこまで劇的な変化はないが地味に全体的に強化されてる。だが、前に戦った二体で学習したため、不意打ちを喰らって結晶に閉じ込められた後は抜け出してあっさり倒した。

## 第六話　ホルリ　ススム　（前書き）

この話のフルフルは基本的にフルフルとしての形から外れません。理由はフルフルが可愛いからです。しかし、戦闘時に一部姿が変わることをフルフルファンの方はお許しく下さい。

こんなこと書いていますが、今回、戦闘は無しです。

## 第六話くホリ ススムく

前回ピンチに陥った少女ハンター（片手剣）と美人学者＋その他を華麗に助け出した俺はそのまま「大丈夫か」「ニコッ ポッ」を決めるはずだったのだが……彼等は俺がグラビモスと戦っている間に謎のスタンド使いの攻撃を受けたのか気絶していた。どうしてこうなった。

とりあえず彼等を、この沼地で一番安全且つ清潔であると自信をもつて紹介できる我が家へと運び入れた。

この自慢の巣もこの五年間の成長の証だ。まず入り口から通じる広間を拡張した。大きさはグラビモスが余裕を持って寝れる程まで広げてみた。また食料貯蔵庫、寝室、植物・菌類栽培用の部屋、物置などを作った。これでもまだ用途を決めてない小部屋が三つほどある。また出入り口を今までのに加えて上に掘り進んで、洞窟内を経由しないで巣に直接入れるルートを作った。

後は雪山にまでつながる穴も掘った。これはある日ふと、そうだ、長いトンネルを作ろう。と思い立って掘り始めてから、そのまま何日もひたすら飲まず食わずで掘りに掘り続けては掘り堀りと掘り進み、掘って掘って掘り壊し。掘って掘って掘り溶かし続けて。あれ、なんでこんなことしているんだ。俺、訳が判らないよ。髪型モヒカンにしたいなど、思考が混濁し始めた頃、雪山につながった……後のチビフルの黒歴史くなぜ私は雪山に掘り進んだのか？くである。

俺の黒歴史の事はさておき。気絶している彼等を巣の広間に運び入れた訳なのだが。一体何が起きたのか皆酷くうなされている。苦し

そうにしているので、ガスマスクを剥がしてやろうと。優しい気持ちから俺は行動した。顔を見たかったわけではない。

まず学者B、研究者なおっさん白髪交じり。以上。気になったんだが、なぜ彼等はこのなガスマスクをつけていたんだらうか？まあいい。このおっさんのガスマスクを外してみても、実験台にしてみたら特に変化はないようだ。

次に美人の匂いがする女学者さんである。期待に胸が高鳴る。ワクワク。慎重にマスクを外すとそこには優しい顔立ちの美人さんがいた。栗毛で目に入らないようにするためか髪は後ろで纏めている。耳は長く特徴的な形をしており、この美人さんが竜人族であることと、俺の嗅覚の優秀さが証明された。

次に少女の方も外してみた。少女の方は肩を少し過ぎた所までの黒髪のツインテールの勝気な雰囲気を持つ可愛い少女で、まだ子供みたいなあどけなさが残っている。よくよく見てみると、この武器は確かデスパライズで防具はザザミー式である。懐かしいなあ。ドスの頃この装備で遊んでたんだよな。初心者かと思っただがこの装備の事を考えると単にこの沼地の不気味さで緊張していただけらしい。

しかしこの三人はなかなか起きないな。この沼地で気絶などしていたら、すぐにイーオスやランゴスタ達が集まって骨も残らないぞ。これは起こしてやるべきだらうか？だとしたら起こす手段をどうするか。電気をながしてビリッとさせるか、叫んで音で叩き起こすか。普通に揺すって起こすか、はたまた光を思いっきり当てるか。

いやここはあえて起こさずに今の内に美人の匂いや寝顔を見て楽しむか、辛そうなので装備や服を脱がしてみるとか、体中を嘗め回してみるとか。などうんうん呻って考えていると。そのような不埒な考えに及んでしまったのがいけなかったのか、少女が目覚めそうな

心配がした。

やばいやばいやばいどうしよう目覚めにこんな生き物がいたら驚くよね。そうだよ。間違いないよね。叫ばれたらどうしよう。いますぐ逃げ出したい。マツハで逃げ出したい。実はさっきまでの考えは単なる現実逃避だったんです。起こすかどうかを考える事で目覚めた後の事を考えないようにしてたんです。ごめんなさい。

あ、目が覚めた。

起き上がり周囲を見回した。学者さん達を見つけ無事なのを確認してホッと息をついた。そして、そのままこっちを見た。

目が合ってます。コッチミンナ。

「……………」

まだ目は合ってます。照れる。

「ちっさい」

「ホワ（うっさい）」

フルフルにちっさいとか言うなそれは周囲の男ハンターの精神に130のダメージを与えるぞ。気にしている人だったら即死だ。あ、何か考え込んでる。謎のスタンド攻撃についてかな。

む、俺にとってもそれどころではないぞ。今まで考えないようにしていたが。どうやら、この世界の言葉も俺は理解できるようだ。商隊の遺品に在った本を見たとき文字が読めたから、言葉が分からなかった時は誰かから習えばいいかなと思っていたからそこまで不安

ではなかったが、習う必要が無いのはやはり楽だな。

考え終わってまた少女の方を見ると。彼女も考え終わったのか、ちよどこっちを見た。息ぴったり、お揃いだね。

無言で武器を手に取る少女。そのまま学者さん達と俺の間に入りこちらの動きを伺っています。なにこれ。しかも、彼女は足は震えているし腰も引けてる。ただその目からは守らなきゃいけないと思う気持ちが伝わってくる。もう一度言う、なにこれ。そんな悲壮感たつぷりにこっちを見つめないでよ。俺ラスボスじゃないよ。ぶるぶる。ぼくわるいふるふるじゃないよ。

とりあえずどうしようもなくなったの離れた所で寝たフリをする。寝たフリ開始から暫くして、こちらに敵意がないのが判ったのか、こちらに警戒しつつも彼女は学者さん達を起こし始めた。

二人とも起きる時に悲鳴をあげた。でも俺はそっちを見なかった。怯えられた顔まで見たら俺、泣いちゃう。あれ、おかしいな。巢の中なのに雨が降ってるよ。前がうまく見えないや。

俺が悲しみに浸っていると。急に女学者さんが声を上げたかと思うと俺の存在を忘れて皆で話し合い始めた。寝たフリをしながら聞き取った情報をまとめると。

彼らは探査隊で、この沼地の特殊な毒とそれによる異常な成長を遂げたモンスター調査にきた。その毒はガスマスクをしてないとハンターも三十分で死ぬんですって。しかしこの巢は他の場所と違い清浄な空気が保たれている。だから、何故かガスマスクが外れていても、彼等は死ななかった。ついでに女学者さんの名前はミナさん。少女の名前はツキカちゃん。学者男はルアルさん。



## 第六話〜ホリ ススム〜（後書き）

神の優しさ〜前回書き忘れた分もあるよ〜

### 人食いの機会

実はこの主人公、人を喰えば割と簡単に人化できるようになります。そのため、この沼地では異常な程、死体や半死人を見つけられました。周りの人が死にやすくなるわけではなく。死体が集まり安くなる。

### 特殊な毒ガス

主人公の急成長の原因の一つ。普通のモンスターは成長速度が上がリ、代わりに寿命が縮む。強い固体なら寿命も減らずさらに強くなる。人体に対しては単に有害なだけ。生物のサイクルを早める効果も有る。

47

### ふつつのあとがき

このチビフルはどこへ行くのか… それは誰にもわからない、作者さえもそれは同じ。…なぜなら、書き溜めしてないからね ミ

次回作書くときは気をつけます。



## 第七話くえっく（前書き）

いつの間にか日刊ランキング一位になってたりしてました。（9月18日）

駄文ではありますが読んでいただきありがとうございます。

## 第七話くえつく

前回のあらすじ、人間の言葉が理解できるのがばれたでゴザル。

ミナさんが、俺が人語を理解しているかもしれないと思ったのは、彼女曰く。

この巢の壁や通路は動物らしい本能で作られたのではなく、失敗を繰り返した末にできた計算された形がある事。壁に規則性のない飾りの模様がついていたり、壁や通路を作ったのと同じ方法で作られたものが落ちてる事。巢が異常なほど綺麗な事。これらのことからまずこの巢の持ち主であろう目の前の小さいフルフルは、かなり高い知能を有していると考えたらしい。

またほとんど、自分達に傷がない状態で巢まで運ばれていた事。一応グラビモスの熱線からツキカちゃんを守り、モンスターだけを倒した事。こちらが起きていても攻撃してこないこと。警戒していたこちらからわざわざこちらから離れたことから。人に対してまったく危機感を感じてないか、または遊び道具として連れてきたのかと考えた。

最後に話をしてる最中に時々ピクピクしていたのとツキカちゃんが話しかけたら返事をした。と言っていたので。俺がわざとらしく寝返りを打ちマスクを足で押し出したのを見て、言葉を理解していると思ひ。思い切って話しかけてみたら見事返事が返ってきたと言うことらしい。俺の完璧な演技を見破るとはたいした奴だ。

つまり俺は見事に鎌にかかったらしい。むしろギロチンに滑り込んだの方がいいかな？

結果的には目標の一つである人間とのコミュニケーションが不完全ながら出来ることになった。まだばらすつもりは無かったのにいきなり「あなた、言葉が解るのね」って言われてびっくりはしたが。

今考えると彼等の方から言葉が解ることを理解してくれたのは、俺にとってはかなりのプラス要素になる。

猫がいきなり私、人間の言葉解ります。と書き始めるのと。猫が人のしゃべる言葉に的確にニヤーと返事をして喋った通り行動してくれるのでは。同じ人間の言葉を理解してくれているのであってもイメージが変わるのだ。後自分から人間の言葉解ると伝えて気味悪がられたら、俺は深い悲しみに包まれて二十年は未開の地に引きこもりたくなるだろうからな。

それはともかく、巢の様子を見て俺の知能の高さを見破るとは……  
なんか照れる。

なんだかんだでもう五年。この巢は殆ど俺のが掘って広げたものだから、この巢には最後のときは此処で迎えたい。と世界に向けて叫んでもいい位の愛着はある。しかしこの巢はそこまでの知性を感じさせる巢だろうか。典型的な竜ならこれ位するんじゃないかな。と思うのだが。

たとえばこの広間は、ある日せつかく目が見えるんだから。こんな陰気な岩の壁じゃなくもつと綺麗にしてみよう、ついでに防御力も上げようと思ひ立ち、それから三ヶ月経って完成したのが壁や床、天井までもが光り輝き、ちよつとやさつとでは傷付かない。この総クリスタル張りの広間、池とシャンデリア付きである。

作り方はいたって簡単。岩を削ってそこに唾液や電熱で溶かしたク

リスタルを流し込み、冷えて固まったら余分な分を削り取るだけ。  
これを繰り返していくだけの簡単なお仕事です。

天井に関してはアクラ・ジエビアを倒した後、アクラ・ジエビアみたいにクリスタル発射できたら楽なのに。と思っただけでやってみたら出来た。その後広間が無駄に広すぎて寂しかったのでシャンデリアを地面で苦勞しながら作り上げて、天井と溶けたクリスタルで繋げて開いていた空間を埋めてみた。

竜って確か光物が好きなんだよね？宝石とか溜め込んでるイメージがあるし。なら。これくらいするよね。あれ、それはカラスだったけな。

話がまたもずれたが彼女の説明を受けた俺がミナさんって頭良いのね。流石、学者さん。と感心しつつ頷いていると「危ないですよ」とか「危険だ」と言っていた二人も警戒しながら近づいてきた。泣ける。電撃のクエストにでてくる最小金冠フルフルより小さいのに何でこんなに警戒されるの？

「本当に、大丈夫なんですか」

「大丈夫よ。こんなに近くにいても攻撃してこないし、ガスマスクを渡してくれた所を見たでしょう」

「でも、モンスターはハンターを外敵と排除してくるって言われてるし……」

うんそうだよ。ゲームでもモスが風圧を受けてハンターに襲い掛かってきたり、野生のアイルー達に襲い掛かれたのはいい思い出です。この世界でも、ハンターは外敵として殆どの生き物に認知されているしね。普通に可愛い見た目だったらほった舐めたりして終わりなんだが、この姿ではただの味見になってしまう。……この

味は嘘をついてる味だぜ。とでも言えば許されるかな。まあ信用はこれから勝ち取ることにしよう。友達はなるものじゃなく、いつの間になつてゐるものって誰かも言つてたし。

「まあ、この小さなフルフルが危害を加えないとしても。私たちに今生きて此処から出る手段がないのよね」

へ？なんですと。ルールさんは解っていますな顔してるけどツキカちゃんと俺はびっくりしてるよ。

「どうしてですか、ミナさん！」

「ツキカちゃん、落ち着いて。ほら私たち気絶してたし、洞窟の前でそろそろガスマスクの残り時間が限界だったでしょ。今確認したけど。ガスマスクの効果が切れてて、毒ガスの所に出たら私たち死んじゃうのよ」

それは一大事だ。ツキカちゃんも驚き。どうしようかと、腕を組み目を閉じて呻りながら解決策を考えてるようだ。む、目を開いたなにか閃いたのかな。

「そつだ！お父さん達はどうなったの？」

訂正。忘れられていたお父さん達の事を思い出したようだ。俺も忘れていたが。

「ジンさんたちなら大丈夫よ。あなたの自慢のお父さんなんですよ」「そつだよね。お父さんなら大丈夫だよね」

ランスと大剣はいいのかお前ら。そのお父さん達は、大量の人間の血の匂いが流れてこないの、恐らく大丈夫だろう。一番怪我が多

いのは大剣さん、ジンさんであろうガンナーとランスは同じ位である。この血の量の差は役割と防御手段の所為かな。俺にかかれはこの沼地ぐらいの範囲なら人間の血が流れた量など嗅覚で余裕で把握できるのだ。

「では、我々はどうすれば此処を抜け出せるんですかな？」

「迎えが来るまでここで待つしかないんじゃないかしら」

「そんなあ、短時間の調査依頼だったから食べ物なんて竜車に置いたままですよ」

おお、ルアールさんが久しぶりに喋った。けどまたミナさんとツキカちゃんの会話に戻っちゃた。でもさつきからルアールさんは何してるのかな？俺が安全なフルフルだと解ってから器具だして周囲を調べ始めてるし。そして、ツキカちゃんは見た目と違い若干アホの子なのか？

「食料なら、そこに池があるじゃない」

「わたしお魚釣り苦手なんですよ。それにお魚だけじゃ辛いです」

アホの子確定の瞬間である。仕方ない俺はミナさんの服を引っ張ると着いて来いと言う意味を込めて一鳴きして巢の奥の方へと歩き出した。

……着いて来なかった。もう一度一鳴きして翼で一生懸命手招きしたら着いて来てくれた。

「……………これは、凄い」

ルアールさんが驚愕しているのは俺の自慢の食料保存庫である。前

はただ置いておくだけだったが。今では雪山から持ってきた氷結晶で冷やすことによる長期保存も可能になっている。氷結晶にはかなりお世話になっています。保存しているのは主にアプトノスやケルビなどの肉がメインだが、グラビモスやシヨウゲンギザミの肉も保存してある。肉だけじゃなく魚も冷凍保存している。食料を見せてあげたのが良かったのか、ツキカちゃんの俺に対する警戒心が一気にゼロになった。しかしミナさんが次の発言した瞬間、ツキカちゃんのテンションが下がった。

「これが沼地の生き物の肉なら、毒の成分が残っているかもしれないわ」

ツキカちゃんが悲しみに浸っていると肉を調査していたルアールさんが。

「大丈夫でしょう、調べた所、肉には毒は残留してません。それに、こちらにはポポなどの雪山の生き物の肉がある。気になるならこちらの方を食べればいいでしょう。それにしても素晴らしい品揃えですな」

と言った。ツキカちゃんのテンションがぐんとあがった。見ていて楽しいなこの娘。しかも俺も褒められた。見る目あるねルアールさん。気分を良くした俺は、彼等を俺の自慢の植物園に連れて行った。

「……………綺麗」

「……………ここまでとはね」

「……………素晴らしい」

上からツキカちゃん、ミナさん、ルアールさんの反応である。ふは

はもつと褒め称える。沼地の植物でも日光ゼロでは育ちが良くなかったので、光が必要な植物のために此処は天井に大きな穴を開けて、其処にクリスタルをはめ込むことで十分な明かりを保っている。暗い所が好きな植物やキノコは暗くした隣の部屋にて育成中。入り口以外は殆ど腐海の様なありさまになっているが。水は雨が流れて来たのを溜め込み、少しづつ流れ込むようにした。生命力が強いのでこうすることで、時々見に来るだけでも勝手に育つようになっていく。

俺の家の素晴らしさを三人に見せ付けていると。ミナさんが何か考え込んでいた。まさか俺の家を乗っ取るうと考えているのか。だがペットとして置いてくれるなら、ミナさんにならとられても構わないぞ。と俺もふざけたことを考えていると。

「ねえ。この巣はあなたが殆ど広げたものなの？」

「ギユ（そうですたい）」

俺が熊本風に答えてみるとミナさんはまた少し考えた後。

「なら、この巣から直接、沼地の外に出る穴ってあるかしら」

「ギユイ（それはないけん）」

今度は福岡風に答えてみた。

「そう。そこまでうまくはいかないみたいね。……例え今から掘ってもらっても、何カ月後になるか…」

後半のミナさんの小さく言った独り言もバツチリ聞き取った俺は考えた。結果、一日あれば十分だと出た。翼を懸命に動かしてジエスチャーで頑張つて伝えてみた。ダメだった。仕方ないので文字と図



で使ってギャオギャオ言いながら頑張って伝えてみた。結果。

「えっ」

「えっ」

「？」

一名を除き伝わった。でも、何そのリアクション。ツキカちゃんだけが俺の味方です。

## 第七話くえつく（後書き）

### 人物紹介

ルアールさん

軽いマッドサイエンティスト。でも、孫が出来てからはその気は薄くなった。五十三歳、王立古生物書士隊隊員。白髪交じりの茶髪。

ミナさん

竜人族。学者もしている。二十四歳、栗毛で髪の毛は後ろでまとめている。優しい顔立ちだが、意外と厳しい。行動派。

ツキカちゃん

ハンター。片手剣使い。ダイミヨウザミまでなら一人で倒せるが、ジンさんが付いてくるので一人で倒したのはイヤクックまで。黒髪ツインテール。アホの子気味。

第八話〜苔まで愛して〜（前書き）

途中から視点が切り替わるよ！ 注意してね！

二次創作に必要なのは原作を愛する心と気合、そして少しの遊び心  
ってばっちゃんが言った。

## 第八話　苔まで愛して

前回のあらすじ「えっ」「えっ」「？」解せぬ。

「本当に一日で沼地の外まで掘れるの？」

驚きから回復したミナさんの第一声は、賞賛の言葉。ではなく本当にできるのか？と言う疑問の声だった。この小さい体だから疑問に思ったのだろうが。意外と洞窟から沼地の外までは近いのだ。

この沼地は周囲を大小さまざまな山に囲まれていて、交易道に近い谷になっているところが今回彼らが入ってきた場所だ。この巣がある洞窟はその入り口近くの山の中にある為、外までの距離は巣の中で一番沼地の外に近い所からだとして、直線距離で300～500メートル位だろう。今の俺なら一日で十分掘れる距離だ。そんな、穴掘りで大丈夫か。大丈夫だ、問題ない。

てな訳で沼地の外に一番近い場所から穴掘りを開始することになった。あ、みんな危ないから離れててね。穴掘りの場所についてきた彼等を離れさせると、俺は口を大きく広げ硬い岩壁に齧り付いた。

「ギョオワア（これより、穴掘りを開始する）」

俺の穴掘りはいたってシンプルだ。岩を削り喰らい。体内の電熱や胃液で溶かしたものを尻尾の口から壁に塗りつけて補強する。ただ、それだけだ。岩を削り、喰らい。そして排出、補強。それを繰り返し俺はひたすら外に向かって前進する。美人の頼みだ全力でいかせてもらおうじゃないか。

削り喰らい排出補強削り喰らい排出補強削り喰らい排出補強削り喰  
らい排出補強。削り、喰らい、排出、補強。削る、喰らう、排出、  
補強。削って喰らって排出して補強する。削り、喰らい、排出、補  
強。削り、喰らい、排出、補強。削る削る削る削る。喰らう喰らう  
喰らう。排出排出排出。補強補強補強。ガリガリゴリゴリガキンガ  
ギン。ギャルギャルジャリジャリジュルンジュルン。ジャリヤジャ  
リヤベタベタドルンドルン。削り喰らい排出補強。ガリガリゴリゴ  
リガキンガギン。ギャルギャルジャリジャリジュルンジュルン。ジ  
ヤリヤジャリヤベタベタドルンドルン。

今日は記念だから、人に会えた歓喜の日だから、ひたすらひたすら  
ひたすらに俺は掘る。掘っていく。掘り続ける。

「なんで、あのフルフルは私たちを助けてくれているのかしらね」  
「ほえ、優しいフルフルさんだからじゃないんですか」

……この子本当にハンターなのかしら？……確かに、いろいろあり  
すぎて混乱しているのはわかるけど。自分で言っていたじゃない。  
モンスターは人を襲うって。ポポのお肉で餌付けでもされてしまっ  
たのかしら。

「ツキカさん考えても見てください。幾ら知性が高いと言っても彼  
は竜です。あれほど強い固体なら本来は食事のとき以外は手を出さ  
ない限り人間やハンターにすら無干渉を貫くはずです。何故あの竜  
は私達を助けたのか？今態々外から自分の巣に繋がる道を掘ってい  
るのか？大変気になります。僕は彼が何を思って行動してい  
るのかを考えるよりも。この巣の中で育てられている希少な植物や  
菌類。保管されていた様々な稀少鉱物。モンスターの素材。さらに

何故、此処は毒ガスのが影響が無いのか？等を調べる方が有益だと思えますねえ」

「……毒ガスの調査はいいけど、この巣にある物の調査は後回しにしてね」

こっちの人は、孫が産まれた二年前に治ったはずの病気が再発し始めているし。どうしたらいいのかしら。

「ミナさん。よくわかりませんが、とりあえず食事の準備をします」

「……あなたはそれでいいわ。いつてらしゃい」

「はいっ」

ツキカちゃんはそのでいいわね。問題はフヒヤヒヤ八言ってるこっちの人ね。

「ルール博士は、何故、毒ガスの影響がこの巣の中では無いのか見当が付いていますか？」

「んん？僕の予測を聞きたいのかね。まだ大まかなことしか予測は立てられてはいないが、まあいいでしょう。まず我々が洞窟の入り口近くの時点で調べた時、その時点で洞窟の内と外との毒の差は二割ほどの差がありましたね。つまり洞窟の内部に毒を中和もしくは排除する物があると我々は考えました。此処まではあなたも理解しているでしょう。その所為で我々は進むべきか退くべきかという会話になり、そこでシヨウグンギザミの襲撃に遭ったのですが。その後、……まあ、その後もいろいろありました、結果的にあの飛竜に助けられ、この毒ガスが存在しない彼の巣の中へ招待されたのだから、別にいいでしょう。むしろ好都合と言ってもいい所だがね。で此処から僕と君との考えの違いだろうからしっかり聞いてくれよ。まずこの巣の中だ。此処は毒ガスが無いのもあるが。流れる空

気自体が沼地にあるにしては異常に綺麗だ。これは壁や地面が綺麗にされている所から、恐らくあのフルフルが電気などでまとめて掃除しているのもあるんだろう。だが僕は其れだけがこの空気の清浄さを保っているのではないと思うね。その根拠に関する一部の話を言わせてもらつと、洞窟は基本的に風の通りが良く空気が澄んでるか、流れが悪く淀んでいるかのどちらかに成るのだが此処には風の流れある。つまりこの巢には外の有害であるはずの毒ガスを含んだ空気が流れこんでいるのだよ。だがこの巢の中は清浄な空気が保たれている。洞窟内の空気が流れ込んでくる場所を調べて見たが其処も空気は清浄なままだつた。正確に言えばほんの少し、人体に何の問題も無い程度には毒は含まれていたがね。……ん？本当に大丈夫だ。百年間吸い続けて寿命が一週間縮むかどうかだよ。まあ、僕の寿命はさておき。問題は何故この巢の内と外ではこんなにも毒ガスの量に差があるのかこの一点に尽きるね。考えれば解ることだが毒の浄化はこの巢の中で行われている量は少ない。なぜなら、この巢の中に入る前で毒ガスは浄化されているからだ。なら何処で。巢の外の洞窟の中にいた我々だがあの中でも一番ましな所で外と比べて三割位だつた。なら簡単だ。毒ガスの浄化はこの巢とあの洞窟を繋ぐ通路の中で行われていたんだよ。その結論に至つた段階で、既に僕はあの通路に在つた、植物。鉱物。苔。菌類。虫に至るまである物を片つ端から採取した。これらを相応の機材で解析すれば、間違いなくどれかが毒を分解する働き若しくは内に溜め込む働きを持つているはずだ。その中でも僕がこれだと目星をつけているものはだね。これだよ。この特徴的な形をしている苔だよ。この素晴らしい苔を見たときは驚いたね。独特の色合いを持つ濃い緑と赤色のこの苔、これは新種の苔だ。沼地と洞窟に関してなら書士隊の中でも一、二を争うほど詳しいと自負する僕が間違いないと断言するよ。この苔は恐らく突然変異によつて出来た新種だ。何らかの特殊な環境によりこの苔は変異したんだよ。これは大発見だよ！何処が大発見かというとな（……………一時間経過……………）そのなかでも特徴的な

のはその生命力だね。他の土地よりも厳しいこの沼地でこの苔はあの通路で他の植物や苔等を寄せ付けられない程に育っていた。だが、そうなる問題は何故その苔がこの巣と洞窟を繋ぐ通路外にまで繁殖していなかったのかだね。この苔の生命力なら動物に取り付いてそのままそこで成長するぐらいのことは出来そうなのにね。もしかしたらこの苔は、その凄まじい生命力と引き換えに、繁殖能力の低下若しくは繁殖形態が変化しているのかもね。思えばこんなにも成長しているのに胞子を飛ばした後が無いのは変だと思っていたんだよ。もしかしたら、この端の方にある子実体の様な形をした部分が横に、横に伸びていき少しづつ生息域を広げていこうとするのかな？いや、きつとそうだろうね。毒ガスに関してはこの巣で調べられることは調べたから、ちょっとこの巣の中を探検してくるよ。僕にとっては此処は宝の山みたいな所だね！本当に！調べ物を回収したら戻ってくるよ。ではまたね。ミナ君。ツキカ君。」

.....

.....

「ミナさん。どうしたんですか」

.....ハッ

「ごめんなさい。少し休ませてくれないかしら。ちょっと注意しようとしたら、パンドラの箱を開けてしまったみたいで」

「いいですよ。でもご飯が冷めるので早く来てくださいね。後、パンドラの箱って何ですか？」

「.....あなたは気にしないでいいわ」

「分かりました！」

.....ふう、疲れた。



## 第八話〜苔まで愛して〜（後書き）

ルアールさんの長台詞。一回全部消えてorzしたのは後書きを読んだ君と作者だけの秘密だよ。

神の優しさ？

すごい苔

チビフルが唾液の能力研究の末に産み出した。狂気の液体フクダケトケール君（仮）を浴びた苔が突然変異して産まれた物。ありとあらゆる毒をエネルギーに変える力を持っている。すりつぶせば様々な毒に対応できる優秀な解毒薬が出来る。乾かして煙を吸えば肺に溜まったニコチン、タールも分解してくれる優れもの。副作用があるとするれば、解毒薬は服にかかるとハンターの防具でもなければ溶けてしまうこと。煙は大丈夫。

## 第Qまたは？話〜GUN道〜（前書き）

あれです、いつもと比べてかなり遅かったのは、どうにか頑張つてノクターンを完成させようとして挫折したり、別の奴の第一話をとりあえず書き終わろうとして挫折したり。やけになって、小説を沢山読んだり、ドラクエジョーカー2（プロフェッショナルではない）でメタキン狩りをしていたからでは決してないです。

なにはともあれ、お楽しみください。



【クエスト：山肌を刳り貫け】を達成しました。ってところだね。サブターゲットは途中にあったアレにしよう。アレは凄かった。明らかに古代文明の遺産の香りがする。惜しいけどみなさんあげるしかない。アレを渡せば素敵、抱いて！とまではいれないが、かなりの好感触を得ることが出来るだろう。期待を胸に俺は彼等が待っている巢へと戻っていった。

…なにこれえ？（c v 千年パズルを解いた少年Y）特に何も伝えてなかったが人の家でくつろぎすぎじゃね。仮にも此処、竜の巢なのに。

まず一番警戒をしていないといけない。ツキカちゃん。彼女は疲れていたのか食べて今はぐっすりお休み中です。寝顔がとってもプリティーで緩みきっています、ツインテールを解いた寝顔は余計幼く見える。まさに天使の寝顔だね、頬に付いたお肉の欠片がアクセント。でも、防具を外して寝ているのはハンターとしてはどうかと思うよ。俺の倉庫から持ってきたであろう毛皮を敷いているのでとても快適そうだ。

そしてミナさん。彼女もツキカちゃんが持ってきたであろう、毛皮の上で寝ている。ツキカちゃんとの違いは彼女は適当なものの上に毛皮を敷き椅子代わりにして、周囲を警戒していたが疲れて寝てしまっただろうと言うことだ。穏やかな寝顔が逆にこの場でなにが起きたかを伝えてくれそうな気がする。

その疲れた原因は主に彼女の足元に転がっているルアーさんだろう。俺が居ない間、はじめて見た時の白髪交じりの普通のおっさんと言う印象は消え失せ、明らかな狂気の気配を感じさせる雰囲気

放っている。

この部屋に来たときに気になっていたが、この部屋に他の部屋のい  
ろんなものが持ち込まれていた匂いがしていた。ルールさんが持  
ち込んだのをツキカちゃんやミナさんが戻したのである。持ち込  
まれたものは主に、植物や沼地の生き物達の素材が多い。……大事  
にしている奴は持ち出されていないな。

最後にはツキカちゃんの眠り投げナイフで、暴走し続ける彼は強制  
的に眠らされたようだ。それでも、うつすらと開いた瞼から見える  
血走った目からその時の彼の狂乱振りを思い伺わせる。

……と言いか眠り投げナイフは人間に使っていいのか。

一日も経たないうちに、また起こすかどうかを悩まないといけなく  
なるとは童生とは儘ままならない物なのだなあ……  
とりあえず、ハンターなので心苦しいがツキカちゃんを揺すってみ  
ることにした。天使の寝顔に近づいていく。クツ、神は俺になんて  
試練を与えたのかっ！だがこれも戦争なんだ。許してくれ。

ユサユサ、ユサユサ

「……うみゃうにゃ……お腹いっぱいですよ……」

ツキカちゃんなんてベタな……全く持って未恐ろしい子だ。まさか  
この俺のハートを一撃で貫くとは、なんと萌力。見るよこの緩  
みきつた寝顔。信じられるかこいつハンターなんだぜ。もうお腹一  
杯らしいんだぜ。

だがこのツキカちゃん、起きる気配ゼロッ……全くのゼロッ……この一  
回のやり取りで俺には彼女を起こすことなど出来ないと判断した。

もう俺にはこの子の幸せそうな寝顔を少しでもゆがめることが出来そうにない。さっきのやり取りは俺にとって心に大剣を差し込まれた後、いにしえの秘薬をかけられたようなものだ。二回も喰らった俺は堕ちる、堕ちてしまっただろう。だからもうできない。これはこの童生で初の人間に対する敗北だ。

ではルールさんと言いたいが彼は念入りに殺られたようで当分起きそうにないので、却下する。

こちらも随分心苦しいがミナさんを起こすことにしよう。匂いでなんとなく解ったが、彼女は大変苦労していたようだから後回しにしていたが結局こうなったか。これは彼女が苦労体質と言うわけではなく、他二名が周りに苦労をかけやすい人物なのだろうな。マッドと天然系アホの子に挟まれているとか波乱の予感しかしない組み合わせだしね。

ではミナさんを起こすのでしょうか。ペタペタと寝ているミナさんに近づいていると、ミナさんが起きそうになった。寝ていても一応周囲の気配を感じ取れるのか。でもそれ学者の役目じゃなくてハンターの役目じゃないか。

「……………んう……………はああ」

起きたなう。ちょっと色っぽい起き方。

「ふう……………ッ!?……………!……………ハア……………」

解説なう。目開ける 目と目が合う びっくりされる 昨日の事を思い出した 納得 落ち着く。ちょっと傷付いたなう。俺のドラゴンハートにビビが入ったなう。何故だ昨日最高級のおもてなしをし

たじゃないか。そう思ったので、ちょっと非難の気持ちを込めて見  
つめつつ鳴いてみる。ホワホワ。

「う…ごめんなさいね…ちょっと巢の物を動かすすぎたみたいね…  
…謝るわ」

微妙に伝わってない上に怯えられている気がした。気のせいだと思  
いたい。気のせいじゃないだろうけど、そう思うだけでも心へのダ  
メージが随分違うことをこの人達から学んだ。学ぶことで俺は前よ  
りも強くなることが出来る。そう思えばこの痛みも辛くはない。辛  
くないったららない。

起きたばかりのミナさんには悪いが彼女にはやってもらわねばなら  
ないことがある。G級クエスト寝ているツキカちゃんを起こせだ。  
俺は一撃で三死ほどのダメージを受けたが、彼女ならやってくれる  
筈だ。俺はそう信じている。

少し警戒しているミナさんに翼でツキカちゃんを指し示してあげる。  
さあ、俺に出来なかった事を成し遂げてくれ。

「……………」

ミナさんは幸せそうな寝顔で熟睡しているツキカちゃんを見ると。  
黙ったまま近づき、そのまま、ツキカちゃんがくるまっている毛皮  
を引っぺがした。なん…だと…

「ふにゃっ」

「起きなさい」

「……………うう、もう朝ごはんですかぁ」

まず初めにご飯の事を気にするとは……ミナさんも呆れたのか言葉を失っている。俺も同じ気分だ。

「……！あ、おはようございます。それと、そっちは昨日のフルフルさんですね。穴掘り終わりましたか？」

黙っていた俺達を不審に思って考えていたのか、少し考え込んだ彼女から出たのは朝の挨拶だった。そして、その後に続いた言葉で俺もすっかり忘れていた目的を思い出した。しかし目が覚めた後の頭の回転のよさは流石にハンターらしいな。ツキカちゃんのハンターとしての評価が俺の中で少し上がった。

「キヤオキヤオ（終わったよー）」

ジェスチャーと鳴き声で穴掘り終了のお知らせをする俺。なぜか今回は理解してくれないミナさん、だが代わりにツキカちゃんが理解してくれたようだ。ポンツと手のひらを拳で打つと俺に確認してきた。可愛いな。

「……なるほど、もう出来たんだ。はやいねー」

「……えっ」

その通りだよ。ツキカ君。だがフルフルに早いとか言うな！それはNGワードだぜ！そしてミナさん何そのリアクション。またも傷付くよ。でもその後の諦めきった顔を見ると逆に慰めたくなるのは何故だろう。

その後防具を付けたり、荷物をまとめたりと彼女達の出発の準備が終わったので、新たに作った沼地の外への直通ルートへ案内した。ルアルルさんは起きなかつたので、いくつかの荷物と一緒に俺が台



車で運んでいる。ちなみにこの台車は拾い物で今回ありがたく使わせてもらっている。

「……本当に出来てる。でも……何…これ…」

「少し変な臭いがするねー」

何これって通路ですよ。形は出来るだけ前世で見たトンネル再現してるけど、確かこの形が重さに強いんだよね。力が支えあうとか何とかで。大きさは車一台なら余裕の大きさに見えました。こっちはないけど。

そして、臭いは仕方ないんだよ！速く掘る為に岩を溶かしてたりしたからね。そっちは少し臭いで済むから我慢してくださいな。

てな訳でただ今通路を通って俺にとつては外出、彼女達にとつては脱出中である。隊列は前から俺、ルールさん、ミナさん、ツキ力ちゃんの順だ。ルールさんはまだ起きないから荷物と一緒に台車の上だ。

暗い所でも大丈夫な俺が危険が多い一番前を警戒し、戦闘力のないミナさんを真ん中にして、念のために後ろからの警戒をツキ力ちゃんがしている。転生後初の人類との共同作業に胸が高鳴る。

ところで暗い通路をひたすら歩いていく時、人ってどんな気持ちになるか分かるかな？まあどんな気持ちになるかは人それぞれだが、行動はいつもよりお喋りになるか、静かになるかの二択になりやすいよね？つまり今みんな静かになっていて、俺のハートは負荷に耐えられずビクンビクンしています。この独特の静寂感なんだか前世の記憶が妙に刺激される気がする。

結局、モンスターの襲撃も無く。無言のまま無事沼地の外に出ることに成功しました。なんだか人付き合いの苦手だったあの頃の記憶

が刺激されまくって心が痛い。喋れないから自分ではどうすることも出来なかったのも辛い。

「……本当に外に繋がっているわね」

「あ！道の向こうにミナさんの村がある山が見えるよ！」

あらミナさんあの村に住んでるのね。意外とご近所さんになるのか。ここは手土産を一つ持たせてあげよう。

その前にアレに気づかせないといけないので、翼で近くに置いていたアレを必死に指し示す。パタパタとな。

「……ミナさん……あれ……」

「……………」

驚きで声が上手く出ないようだな！

そうアレこそ、俺が穴掘り中に見つけた。純クリスタル製の大剣だ。目を引くのはまず、その華麗な装飾であろう。俺もそこその装飾品は作ったがここまで精緻で美しい飾りは人類の手じゃなければ作れないだろう。だがこの大剣で一番美しいところは、その王宮にもないような飾りではなく、この大剣の刃そのものだ。実用的な美と芸術的な美を兼ね備えたその美しさはもはや、俺の言葉では殆ど言い表せない程だ。一番近いのは、触れるものを皆、切り捨てるような美しさ……だろうか。

そして明らかに古代文明の遺産と言ったのは、この大剣の素材のクリスタルはとても硬いのだ。掘り進んでる時にぶつかつたが、電撃も酸も通じず牙にいたっては折れてしまった。そんな硬い素材を今の人類が細かく加工できる筈がない。

そんな凄まじいものを仮にも飛竜の俺がハンターに与えていいのかと思うだろうが。そこは世の中全てにおいて完璧と言うものは少ないと言うことだ。

この大剣の欠点は大きさと重さ。大きさは通常の大剣の三倍はありどっかの街に居る筈の大長老なら持てそうだが一般ハンターには厳しいだろう。次に重さだがこのクリスタルは硬い分重いらしく、グラビモス以上の重さは確実にある。運ぶ時はかなりきつかった。

つまり人類では到底扱いきれない代物なので別に渡してもかまわな  
いと言っわけだ。……流石に伝説の大長老でもグラビモスを振り回したりは出来ない筈だし。

まだ驚きから回復しきって居ない二人に、今度は進呈のジエスチャーをする。指し示すだけのさっきの動きと違い。今度は複雑な内容なので翼だけではなく、全身を使つての鳴き声を交えた必死のジエスチャーをする。

ギアアキアパタパタペタペタ

「……………」

「……………」

……伝わらなかったようだ。あの時ツキカちゃんと心が通った様に思えたのは気のせいだったのか。

やはり漢は行動で示すしかない様だ。ちよつとグダグダの雰囲気  
纏つたまま俺（ルアルさん＋荷物＋大剣等のみやげ物を装備中）  
と彼女達は村のある山へと向かつていった。

## 第Qまたは？話〜GUN道〜（後書き）

PSPでMH2ndGをつけて確かめつつ、フルフル狩りに行ったら。アナログの反応のいかれ具合が進んで、プレスに飛び込んで二死したorz

自分でも分かりづらくなったので、そろそろ登場人物紹介的なものでも作るかもしれません。

神の優しさ

大剣

用途 苦しくなったときの自殺用。

効果 他の人にとっては普通（？）の大剣。主人公が死にたいときに刃に触れれば首が落ちる。前世の残り寿命（112年）が過ぎると効果は消える。

## 第十話　笑顔とは本来（ry）

てくくと村に向かって歩いているのは、チビフルと愉快的仲間達御一行。

そのチビフル担当を任されているのが何を隠そうこの俺だ。二回目か？このパターン。あの大剣は非常に重いので、荷台には乗せておらず、尻尾を吸盤代わりにしてその脅威の吸着力で引っ張ってます。後ろに大剣がある所為で荷台は引くことが出来ないで押している。大剣と荷物を合わせると流石にこの体でも重いので、現在の俺の速度はミナさんの歩き程度に抑えられている。

愉快的仲間達の美少女、美女担当のツキカちゃんとミナさんは荷台の右側を歩いている。両側にばらけないのはミナさんの戦闘力がなから仕方ないそう。本で殴って戦う学者じゃないし仕方ないね。

愉快的仲間達の黒一点ルアルさんはまだ睡眠中だ。身動きなどの起きる心配すらしなくてぐっすり寝ている。

やっぱりモニターも眠るほどの睡眠投げナイフを、人類に使うのはまずかつたんではなからうか。彼が目覚めるかどうか、今の俺の一番の心配事になっている。何故ならもし目覚めなかつたら、ツキカちゃんに罪が及ぶかもしれないからだ。その時はルアルさんを埋めなければいけない……

こんな風に色々考えているが、あの大剣お披露目会るときから俺は会話に加わっていない。

せっかく外に出たのに何故会話に加わっていないかと言うと。尻尾大剣に引っ付いている。頭　荷台を押してる。翼　荷台のバランス取り。とジェスチャーで必要なパーツを全部使っているからだ。出

来てせいぜい話しかけられた時に、鳴き声で合いの手を入れることくらいだろう。

だがミナさんとツキカちゃんはその後から、俺に話しかけてくれないのだ。二人でひたすら何かを話し合っている。俺も会話に加えて欲しいと思っていたが。改めて考えると女性二人の会話に飛び込むのは、グラビモスの熱線に飛び込むより度胸がいると思うので。今は出来るだけ鳴き声を立てないように静かにしている。寂しさはない。

だがやはり歩くだけでは暇なので仕方なく、周囲の音を聞いて警戒している時に聞こえてしまう彼女達の会話を聞いている。断じて盗み聞きではない。耳が良いので勝手に聞こえてくるだけだ。その会話を並べると

あのフルフルは何処まで付いてくるんだろうか？村まで付いて来たらどうすればいいか？

他のハンターたちは今、何処にいるか？沼地の方を探しているのではないか？お父さんは大丈夫です。

あの大剣は何なのか？何故、持ってきているのか？それよりもあの装飾は綺麗だね。

ルールさんをどうするか？起こしたらめんどくさいから寝かせておこつ。

村に帰ったらなんて説明しようか？難しいことはミナさんに任せます！

このような会話がループしている。特に大剣の装飾についてが長い。やはり何処でも女性は綺麗な物に引かれやすいということか。あとやっぱり大剣に関しては通じてないのね。此処まで持ってきたんだから道中で気づいてもらえたらいいいなー程度には思っていたんだが。……村まで持っていけば流石に通じるはず。

そういえば前に上空から見た村は作り掛けだったはずだが、彼女達の口ぶりから察するにもう殆ど出来てはいるのだろう。となると今回の調査は村の傍にある今まで人の手がつけられなかった、毒ガスが漂う超危険地帯な人外魔境びつくり沼地を村が出来る前に少しでも調査しようと言うことだったのかな？

あの沼地は二、三年前から自分でもおかしいなあと思っていたんだよ。やたらモンスターの数が多かったり、時々異常な程強いモンスターも現れたりしていたからな。

一番インパクトがあったのは、全身キノコまみれのグラビモスだった。

その見た目は動く巨大なキノコの山だった。頂上にある巨大な赤いキノコを中心に紫、黄、青、白、黒などの様々な色のキノコが隙間なく生えていた。そんなキノコの山がその巨大な赤いキノコをユサユサと揺らし胞子を撒き散らしながら突進してきたのだ。痛くなくつつたがモフツと飛んだのでかなり驚いた。プレスも菌糸を発射してきて喰らったらキノコまみれになるプレスだった。そのキノコの量はグラビモスの甲殻の上に更に一メートル分キノコの層ができる程。あまりのキノコの量に肉を食べるまでグラビモスと気づかなかった位だ。

と言うか考えているうちに今気付いたんだが、何で彼女らをもう少しあの巢に留めなかつたんだろう。結局、彼女達と一緒にすごした時間は三時間あるかどうかなんだが。このまま村に入ったら「ありがとう、そしてありがとう」とか感謝の言葉言われた後、さよならフルフルパターンも在り得るんじゃないか。まあ、それでも今後も調査とかでまた会えるかもしれないからいいが。最悪なのは「ありがとう、そしてありがとう」の感謝からさよならフルフル永遠に…

…（完）パターンになることだ。まあ一応飛竜だから正面からなら負ける気はさらさらしないが。鬼退治やヤマタノオロチ退治的に食料に毒混ぜたりなどの、油断させて殺すパターンだったらやばいかもしれんから、一応警戒しておこう。そうしないとこの先生きのこないからな。

そうやって色々考えつつ一時間ほど歩き続けていたら村が見えてきた。村の人々からどんな罵声を浴びせられるかと思うと凄く興奮してきた。嘘だけだな。またもや緊張で思考が混乱しているだけなんだ。

ミナさんの村は、山に囲まれている地形を利用したまるで砦のような形をしている。緊急時には出入り口である門を閉ざすことでモンスターへの襲撃を防ぐことが出来るのだろう。今は開いているその門から入るわけだが、かなり緊張している。とても緊張している。大事なことなどで二回いいいます。

だがここで緊張を理由にして入ることをためらっていてはいつまでたっても、人間と関わり合いを持つことなど出来ないだろう。そして、最終目標のキリン娘とイチヤ×2などでもできはしないのだ。いざ大いなる夢の為村の中へと進もうと一歩踏み出そうとした時。ツンツンと体に触れる感じがした。なんじゃらほい。ミナさんに突かれていた。そちらを見るとミナさんはすまなそうな表情で俺に告げた。

「悪いけど、少しここで待ってくれないかしら。先に村の人達にあなたの事を説明した方が混乱が少なくなると思うの。今までの経緯も説明しなきゃいけないから。ごめんなさいね」

うむ、それなら仕方ないね。猶予が与えられてほっとしている俺を



残して、ミナさんとツキカちゃんは門の中へと入っていった。……あれ？ルアールさん持っていかないのかい？忘れ物ですよミナさん。遅れて気付いたときにはもう俺の声が届かない所へミナさんは行ってしまったようだ。

ふむ、待っている間、暇だし今までの展開を纏めてみるかな。

- 1・昨日いつものように起きたら、生きてる人の匂いがした。
- 2・見に行くとそこにはハンターも含んだ人間の一大団が！
- 3・ストーキングしていると、彼らはショウゲンギザミの襲撃に遭い、バラバラになってしまった。
- 4・女性が多い方をストーキングしていると、ピンチになったので華麗に助けた。彼女等は気絶した。
- 5・目覚めた彼女等の様子を見ると、人語が理解できるのがばれた。
- 6・自慢の我が家を公開。鼻高々になる。
- 7・帰る方法がないらしいので、通路を掘ってあげると伝えた。驚かれた。
- 8・凄く頑張つて穴を掘った。途中でクリスタルの大剣を発見！
- 9・穴掘り完成を伝えた。驚かれた。クリスタルの大剣を見せた。驚かれた。
- 10・巢を出てここまで歩いてきた。会話が少なかった。

纏め完了。気付いたこと。俺は寝ていなかった。

なんだか寝ていないことに気付いたら急に眠くなってきた。くっ……これが人間に会えたことでハイテンションになっていたことへの報いか。しかし俺にも五年ほど野生で過ごしてきたという自負がある。そう簡単に安全な所意外で寝るものか！とは言ったものの穴掘りで思ったより疲れているらしい。かなり眠い。

そうだ！眠い時は時は素数を数えるんだ。つてどつかの神父も言っていたような気がする。というわけで実践。素数が2匹、素数が3匹、素数が5匹、素数が7匹、素数が11匹、素数が13匹、素数が17匹、素数が…… zzz

軽いまどろみの中でゆっくりとした感覚を楽しんでいると、俺の理性とこの体の本能とでも言うべきものが、警告を与えてくる。しかしこの半分寝ている状態の、このふわふわとした感じから抜け出すのはとても大変だし拒否したくなる。警告を無視してそのまま、軽いまどろみの中で、雲になったようなふわふわとした感じを味わいながら、ミナさん達を待っている時。門の上から音がした。

そのまま音も立てずに落下してきたものを、大剣から離れた尻尾をグインと伸ばして弾き飛ばした。ぬ、硬い。でもその割には軽いな。

吹き飛ばしたものが何なのか確認する為、俺は十メートルは吹き飛ばしたものに首を伸ばした。

其処に居たのはおじさんとお爺さんの中間のような竜人族の男性だった。中途半端に小さいなこの野郎。手に持っているのは角竜系の片手剣かな、あんなに棘だらけの奴は知らないけど。

……にしてもこの匂い、ハンターじゃなくて鍛冶職人か？血の匂いが濃くないしなにより、炭や焼けた金属の匂いがきつい。腰にハンマーもあるし手ぬぐいもある、ついでに筋肉ムキムキだから確定だろう。

そのままマツチヨな竜人族の鍛冶職人と見詰め合っていると。門からミナさん達が帰って来た。お帰りなさい。

ミナさんは見詰め合っている俺達を見ると、笑顔のままツキカチャ

んから何かを受け取り。笑顔のままこっちに近づき。笑顔のまま俺と見詰め合っている竜人族の鍛冶職人にナイフを突き刺した。刺された竜人族の鍛冶職人は急な事態に驚き、声を出そうとしたらしいが、麻痺毒が塗ってあったらしく、体をピクピクと痙攣させたまま倒れた。

……怖いッ！ミナさん怖いよ！

刺したミナさんは、その笑顔のまま、話しかけてきた。

「私が居ない間、何かあったかしら？」

重大なことは何も無かったので、俺は伸ばした首を戻して静かに横に振った。ツキカちゃんは竜人族の鍛冶職人を引きずって先に門の中へと戻っていった。

## 第十話〈笑顔とは本来（ry）（後書き）

今回は前書きなし、これからは基本、前書き無しにします。

竜人族の鍛冶職人

150cm位の身長で筋肉モリモリマッチョマン。ドワーフのイメージに近い。武器を打ち合わせば相手の気持ちが変わるという考えを持つ。実践的鍛冶職人。

ツキカちゃんの特技

トラップや薬作り、ナイフ投げ。手先が器用なので細かいことが得意。お父さんの補助の為、弾丸調合も出来る。裏方向け。周囲の人からは、何処の暗殺者だよ！と心の底で思われている。

チビフル五年の成果

手加減可能。寝ながらの警戒。尻尾と首の動きが自由自在。

## 第十一話 この作品はR・15 (前書き)

前書きは基本書かないと言った次の回にこれだよ！

！警告！

今回は下ネタがあります。不快に思った方はその部分を飛ばしてください。そこまで大筋には影響はありません。

追記

いつの間にやら総合ポイント3000超えました、これも読者の皆さんのおかげです。

## 第十一話 この作品はR - 15

ミナさんの後を付いていき門の中に入って村全体を確認してみると、やはりここは村と言うより宿場町としての雰囲気の方が強い。奥の方に大きな屋敷と鍛冶屋、商店、集会所といくつかの民家など村としてのものもあるが、此処の門から村の半分まで商人達が泊まるであろう宿場や荷物を保管する蔵、竜車を置いておく小屋など宿場町としての機能を果たす為のものが多し。更に此処でも商人達に取引をさせるためであるう、村の広場には大きなスペースが設けられており荷物を並べやすいようにしてある。

また奥のほうにある村の機能が集約されている場所には、川を引き込んで作られたと思わしき池と畑がある。お、アプトノスも居るな村の食料用としてもあるだろうが、竜車用として商人に売れるのかな？この村だと需要も必然的にあるだろうからいい値段で売れるだろう。この村の内部だけでも十分自給自足出来るようになってるらしい。あの門といいこの村の全体的な構造といい、子の村は何処に向かっているんだ？ほつといたらバリストや撃龍槍、大砲を装備した難攻不落の要塞になるんじゃないか？現在の一番近いイメージを知っているもので言い表すとしたら、もの○け姫のたたら場かな自然に寄ってみたたら場。

……そして村に荷物と大剣と共に入った俺に浴びせられている視線は、ミナさんとツキカちゃんを除くと二十九人位だな。視線から伺える思いは多い順に疑念、警戒、恐怖、興味、期待、羨望、感謝、捕まえない、撫でたい、乗りたい、無関心、××、○○だな最後の二つは内緒だゾ。

匂いで判別した村の総人数三十八人+三匹より視線が少ないけど、残りは仕事と家の中に避難かな？子供達にはアダルトイな俺の存在

は早すぎると判断されたんだろう。

……あれか？よくある「見ちゃいけません！」とか「あなた達にはまだ早いのよ」的なシーンと同じ位の物体なのか俺は？存在がR-18指定ならめえ的な存在になっっているのか？やっぱり俺は生きてるだけでわいせつ物陳列罪に当たる存在なのか？生きてるだけで2年以下の懲役又は250万円以下の罰金若しくは科料に処されてしまうのか？自分ではそこまでち○ち○（ち○こやぺ○ス、陰茎とも呼ばれる）に似ているとは思っていなかったんだが人間から見るとやっぱりち○ち○（ち○こやぺ○ス、陰茎と以下略）に似ているのか？ちょうどいい感じに小さいから後で「あのいきもの、お父さんのち○ち○（ち○こやぺ○ス以下略）にそっくりだったね」。あ！でもあのち○ち○（ち○こ以下略）の方がおつきかったね！」なんていわれるのを危惧していたのか？でも俺、頑張っているよち○ち○（ち以下略）なんて言われないようにプレスはめったな事が無い限り口から吐かない様にしたし、毎日帯電して体は清潔にしているし、よだれも垂らさないように努力したんだよ！俺はなんとしてもち（以下略なんて呼ばれたくないんだ！俺はち（ryじゃないんだ！t（ryじゃないんだ！

穢れを知らない無垢な子供にとって、俺のような生き物は正しくフルフルの元ネタの通り悪魔または（ryなのだろうか？自分の存在というより見た目について、いまさらながら俺が考え込みながら歩いていると。無事村の中央にある広場に到着した。

ふむ、周囲からバリスタやボウガンなどで狙われる感じはしないな。屋根の上からの奇襲も畏も特に無い。

沼地で見かけた残りのハンター達三人とこの村の門番や警備員の代わりをしているだろうガーディアンみたいな二人が俺が暴れたとき様に戦闘の準備が出来ている。他の人たちも一応武器になるものを

持っているが役に立たないだろうし、何より彼らは一般人なので戦えないだろう。これなら今のところは警戒を緩めていいかな、こちらが警戒しているとあちらにも気持ちが悪わって警戒されるだろうからな。

……その前にこの大剣を此処に刺しておくか、この広場の中央無駄にスペースがあり過ぎる。ここに大剣をモニュメントとして刺し込めば村の名物になって人気が出るだろう。そうなればこの大剣を持ってきてここに配置した俺の人気も上がりマスコット化にまた一歩近づける。俺はしばらくマスコット路線に集中していこうと決めた。手始めにこの村の名物マスコットの地位を目指そう。

ではでは大剣を尻尾でグインと持ち上げまして、尻尾を伸ばしてそのまま広場の中央へザクツとパイルダーオン！

うん、ナイス俺！大剣の刺さり方がゼルダの伝説のマスターソードの如く真っ直ぐだ。一発でここまで出来るとはやはり俺は天才なのだあ〜〜！！と世紀末の北斗な三兄弟の次兄である病人を模倣したとある村の超天才ファミバを真似してハイテンションになっていると村人達の様子がおかしい。パンピーな村人達は驚きや恐怖の表情を湛え、戦闘職のハンターやガーディアン系の人達も武器を構えて警戒と敵意を表しているがその中に恐怖が隠れている。だがツキカちゃんのお父様でジンさんだけは腕組みをしてダンディな微笑みのままだ。何このイケメン、四十過ぎてるだろうに格好良いなんて反則だぜ。しかしなんだ村人と戦闘職達の反応は？「ん？間違っただけかな？」って言いたい！でも言えない！

ツキカちゃんはそんなお父さんに抱きついていきます。安心しきつてニコニコな笑顔が素敵。お前は空気読めコラア。アホの子にも限度あるぞてめえ。周りの人との違いありすぎだろうが。変わらないの



もいことだと思っけどね。今は俺の村入りなんだからフォローを少しでも良いからしてくださいお願いします。…無理か。ミナさんはやっちゃたわね。とでも言いたそう顔をしている。顔から説明が面倒臭くなる、もう一回安全性を話さなきゃ、余計な事するななどが伝わってくる。どうやら何か余計な事をしてしまったようだ。彼女にはこれ以上苦勞をかけたくないからね。

てな訳で戦闘職の方々に警戒されている中、ミナさんの第二回このフルフルは安全です危険ではありません説明会へ添加物や保存料などは含まれておりません〜が開催された。第一回は俺が門の外で待ちぼうけをくらって眠りこけている間に開催され、そのときはまだ小さいなら危険が無いだろう、ミナさんが言うなら…ということに納得してくれたんだって。

第二回開催前にミナさんに言われたが、どうやら大剣を持ち上げ地面に突き刺した事がいけなかったらしい。あんなに小さいのに力強い事や尻尾が伸びすぎじゃないかと村人たちは危機感を覚えたらしい。今後は派手な行動、異常な行動は慎めと言われた。なるほどない。

しかしそうしないと大剣が刺せなかったんだ許してください。テヘペロ。この体だと獲物を前にした舌なめずりにしかならないので心の中だけでやった。無性に悲しくなる。あと大剣に関しては褒めてくれているらしい特に商人と学者夫妻が。…：…：そういえば学者といえは誰か忘れていたような気がする。

人の配置は俺から近い順にジンさん、ツキカちゃん、ランス、大剣、ガーディアン系二人組み。大剣の向こう側でミナさんが村人達に説明会をしている。なおジンさんの装備は今太刀になっている、全体の雰囲気ガチリとはまっているのでこれが本気の装備だろう。

それから、十五分位後説明会は難航しているようだ。やはり大剣持ち上げはやりすぎたか。今のところ俺が安全だと分かってくれているのはミナさん、ツキカちゃん、ジンさん、あのマッチョな鍛冶職人。説明を聞いた後理解してくれたのは草とアプノトスの香りがする生き物が好きそうな純朴そうな村娘一人位だ。

どうなるのかなーと思っていた時、ヤツが目覚めた。

第十一話 この作品はR・15 (後書き)

この作品はみなさんではなく、読者の皆さんの感想、指摘をお待ち  
しています。気軽にしてください。作者は大概喜びます。

人物紹介 時々更新 ネットバレ あるかも（前書き）

時々更新します。人によっては危険！ネットバレ注意！

10月8日更新

10月11日更新

## 人物紹介 時々更新 ネットバレ あるかも

主人公（前世：人間 今世：フルフル） 名前（仮）シロシロ・リフル・シウテクトリ

シルエットが卑猥な主人公。神のメテオで死亡してMHに酷似した世界にテンプレ人外転生を果たす。前世ではプチ不運だったが、130歳以上までは確実に生きるほど寿命を持っていた。人との係わり合いは基本ヘタレ気味。モンスターに対しては慎重すぎる嫌いがある普通に立ち向かえる。

テンプレ的願い事は強い体と神の優しさ×2 強い体と言う曖昧な願いにも神の優しさが加わっている。

子供の頃食べた蝗の佃煮とはちのこが美味しかったので、一般から見ればゲテモノ好きに育った。だが、Gなど食べられないものもある。「……うん、凄く、好きなんだ。 カブトムシ。」

### 能力

フルフルの能力 水晶精製 ミラクル唾液（粘度や酸度などが自由自在） 鋭い爪の出し入れ 電撃の細かい操作（体内・体表限定）体色変化（赤く白の間のみ）

### 神様

見た目は羽の生えた白いドー○君。実はきぐるみのようなものらしい。とても優しい神様。

前世主人公の近くに居た悪霊を祓おうとしたら、ミスに不幸と偶然と奇跡と幸運と強運と悪運と油断と人災と魔法と陰陽道と風水と儀式とすっかりが重なりメテオが発生して主人公は死んだ。御祓いには成功した。

神のなかでも人間の感性に近いが、それでも違いがある。

藤宮 月華

ツキカ フジミヤ

ツインテールな片手剣ハンター。16歳。勝気な雰囲気を持っているが実際はアホの子気味。ハンターとしての腕前はダイミヨウザザミまでなら一人で倒せる程度。お父さん大好きっ子。現在の装備はザザミー式にデスパライズ。父親譲りの黒髪黒目に母親譲りの白い肌と綺麗な顔を持つ。現在、ザザミ装備の為ツインテールにしているが、普段はポニーテールにしている。

藤宮 刃 ジン フジミヤ

へビイボウガンの人。42歳。ツキカちゃんのお父さんで東の方からきた。武士の雰囲気を持つ渋い男丁髷ではない。娘に言われて身だしなみには気をつけている。黒髪黒目の黄色人種カラーで日焼け気味。ボウガン以外に太刀や弓、ハンマーも扱う。G級の実力だが、娘に構いまくっている為、現在上位級扱いにされている。

ミナ クアドランス

優しいな雰囲気の竜人族の女性。年齢は秘密。栗毛の長髪。髪の毛は邪魔になるので後ろで纏めている。怒る時はしっかり怒る方。エルブ村村長兼学者。

ルアール デイレアドレ

マッド気味な学者。54歳。孫の前では良きおじいちゃんになる。白髪交じりの茶髪。沼地と洞窟の第一人者（自称）。自称するだけはある沼地や洞窟に関する研究に対する情熱と知識は、他の学者の数段上に行く。

リル デイレアドレ

ルアールさんの孫その1。4歳。しっかり僕っ子秀才幼女。祖父の血のいい部分だけを受け継いでいる。サラサラのプラチナブロンドに宝石のような青い瞳の将来を期待される見た目。人と喋るが人との関係性を自分で閉じている。趣味は研究と弟の世話。

ゴルデ バデストル

筋肉モリモリマツチヨマンな竜人族の鍛冶職人。100歳。おっ  
さんと呼んでいいか御爺さんと呼んでいいか迷う見た目。本人は爺  
でもゴルデ爺さんでもクソ爺でも構わないらしい。ただし弟子には  
親方またはゴルデ師匠と呼ばせている

## 十二話 蒼、再び

目覚めたのヤツはまだ自分が何処にいるかがよく分かっていない様だ。ギロリジロリと辺りの様子を見回し現在地や今の状況、行われている会話などの情報を取り込み寝起きの脳で処理させている。

ヤツが起きた事に気付いているのは恐らく俺とジンさんだけ、その内ヤツの危険性に気付いているのは俺だけだ。

ヤツは何をするか分からん。マイナス要素の可能性もある為ばれなように電撃で気絶してもらいたいが、ジンさんも気付いているのでそれは出来ない。

しかしこのままみなさんに説明してもらってもなかなか説得が進まなそうなので、危険ではあるが俺にとっては彼の行動により何かしらの変化が起きる方がいい。確実に村人達に衝撃を与えてくれるだろうから。

さあ行くのだ。狂気のマッドサイエンティスト！ルアールさん！

「……………ほう、つうまありいいいい」

地の底から這い上がってくるような声が広場に広がり、その場にいた人々は全員動きを止めた。

俺も動きを止めた。変わりすぎだろルアールさん。

「そこに居る小さく弱いと思われていたフルフルがそこに在る巨大で重厚、絢爛豪華なクリスタル大剣を振り回したので、事前に賢くて人間に害は与えないと説明されてはいたが、そのような強力なモンスターは村に住む人としてはこの村からは速く出て行ってもらい



たい。ミナ君としてはあの沼地の洞窟に閉じ込められた我々を沼地の外にまで導いてくれたので、付いてきたのならある程度はこのフルフルに好きにさせてやりたい。無理やり追い出すなどは論外であると。そういうことですかね。」

いきなりのルールさんの登場に村の人々は啞然としている。皆ルールさんの事忘れていたのか。酷い人たちだな。

「……ふむ、そのようだね。しかしだがね、このフルフルはただ単に我々を沼地から連れ出してきただけではないのだよ。その前に洞窟内で我々を襲っていたモンスターたちを撃破してくれたのだよ、君達も見た。いや、それ以上の力をもつてね。あの時は不覚にも途中でなぜか気絶してしまつたが。その時居たモンスターたちはグラビモスとババコンガが居るコンガの群れ、ランゴスタとカンタロスの大群など、どう頑張つても僕達では死ぬしかないと思つていたからね。まあそれはいいとして」

俺の活躍が軽く流されただと！

「そんなことよりも遥かに重大で貴重な価値がこのフルフルにはあるのだよ！その貴重な価値というものはね、まずなんとつてもこのフルフルが住んでるあの巣に関することだよ。あの巣には素晴らしい研究材料となるものが無数にあつた。沼地に住む様々な種類のモンスター達の素材、沼地や洞窟に生息する無数の植物や苔、キノコが育てられている植物園のような場所、巣の中に落ちていたクリスタルで出来たその飛竜が作つたと思わしき美術品、その中でも特に特におくに！僕が貴重だと思つるのは巣と洞窟を結んでいる通路にあつた苔！あの素晴らしく、特徴的な形を持ち、まるで天界の布のような素晴らしきさわり心地を持ち、魂が野に帰るような緑色を持つ苔だ！沼地に詳しい僕が今だかつて見たことが無い色形を持つ

これまでの苔の常識を覆してくれたあの苔！その苔はね貴重で素晴らしくて美しくくて遅いだけではなく！あの沼地で人類が行動するに当たり最大の障害となる、今だ完全な解毒法が分からないあの毒を浄化する能力を持つているかも知れないだよ。なぜそんな事が分かるのかというよね。それにはまず僕と苔の出会いについて短くだが語らなければなるまい。あれは今から……（三十分経過）……

よってあの苔は沼地の毒に対抗、更にはそれを養分とする能力を得たのだろっね。ここで大事なのはあの苔はこのフルフルの巣にしかなく、詳しい生育方法、繁殖方法も分かっていないんだよ。もしあのフルフルの行動があつたの苔の生育に関わっているのなら僕としてはコイツの意思を尊重させたいね。村から無理やり追い出すとなれば賢いコイツの事だあの巣から旅立つかも知れん。巣から逃げなくてもそんな扱いをしたら巣に入れてくれなくなるかもしれないし、その結果、敵対して討伐したとしてもその時に苔がなくなつたら僕が何をするか分からないよ。何よりコイツの戦闘力は高いからね暴れられたらかなり被害もでるだろうね。まあ苔のついでだがコイツ自体にも僕はかなりの興味があるね、こんな小さな体であるの沼地でも最上位に達する戦闘力。他の飛竜とは比べ物にならない知性。様々なものを作り出している技術、発想。さらにフルフルの原種なのにグラビモスのプレスを耐えた事。異常なまでの人間に対する敵意のなさ。巣で見かけたこいつの優しさ。一学者、書士隊の一員、なにより沼地の研究者として沼地の生物であるフルフルの中で明らかに外れているこのフルフルをね。私は研究したい、観察したい、解剖したい、連れまわしたい、他の奴らに自慢したいと思うんだよ。

だからだね僕はコイツの傍に暫く居ようと思うんだよ。なればこそ僕の傍に居るコイツをだ、無理やり追い出すなんて事はしないで欲しいんだね。いざとなつたら僕が責任は持とう。コイツの賢さと優しさは僕が保障してあげよう。だから僕の研究が楽に進む為にみんな了承してくれるよね。……返事はないが。無言と言う事は反対はしないということか。そうか了承してくれたか。それはよかつた

なあ。なら名前でも付けてあげようかね。観察対象HH-1……じや味気ない気がするね。ならあの沼地の名前も組合せてHH-1・シウテクトリ。……何か違うね。……ではリフル・シウテクトリ。まあ一応こんな感じかな。僕にはネーミングセンスと言うやつが無いからね。とりあえずこんな感じでいいだろう。となるとコイツの滞在する場所を決めなくてはいけね、とりあえずは貸し出し用の竜車小屋の一つでいいよね。もちろん僕が少しは改良しておこう。さてミナ君、話は終わったからとりあえず僕はコイツを竜車小屋に連れて行くよ、食べちゃいけない物、してはいけない事を教えないといけないからね。付いてきたい人たちは付いてきてくれ。後、あの毒に関する事は明日の朝までには終わらせておくから、荷物の内僕のものだけはうちの息子夫婦に持たせて置いてくれ頼んだよ」

……………解剖はお断りします！

ルアルさんの大多数の人のとって訳の分からない話をぶつけられ殆どの人は機能停止した。幸い俺は人の話に飢えていたし、知識は広く浅く持っていたし沼地は文字通り第二の地元なので意識を残す事ができた。他に意識が残っているのはルアルさんの話に出てきた息子夫婦に農場の匂いの村娘A、ミナさん、ツキカちゃん、ジンさん。

しかしこのルアルさんは大変な沼地オタクだな。最初見た時はそんな風じゃなかったのになあもつと大人しめの学者さんかと思っただけ。けどそこまで俺のマイホームを褒めてくれるとは……美人な女性にに褒められたかったけどおっさんでもあそこまで褒められると照れるな。でも勝手に名前付けん！名付け親は純朴な幼女がベスト、そうでなくても女性が良かったのにせめてミナさんがつけてくれ。ただしツキカちゃん。お前だけはダメだ！いやな予感しかない。

意識が混濁している方々を意識が残っている人達に任せて、俺は先に歩き出したルアルさんの後を付いていった。

## 十二話「蒼、再び」（後書き）

主人公の名前は暫定です。

次回はルアールさんとかの心情がメイン。他の作品の書き溜めを少しするので遅れます。ごめんなさい

PS・ルアールさんの長台詞はこれが最後。次あるとしても数文字で飛ばし背景とします。登場人物もルアールさんの話に耐性ができたので。

最初はチヨイ役どころか死ぬパターンもあつたルアールさんが、ここまで活躍するとはこれがキャラが勝手に動くと言う事か……

勢いで書いていたら主人公がニコポナデポを決められたのは内緒。

仮の名前なのに一日は考えたのはもつと内緒。

閑話〱ルアールさんの心情〱(前書き)

ルアールさん視点。短いのです。

## 閑話〜ルアールさんの心情〜

この飛竜は不思議だ。

まず飛竜を含む野生のモンスター達は外敵、特に人間を見かけると排除しようと攻撃を仕掛けてくるものが多い。稀に人間に対して攻撃を仕掛けてこないモンスターも存在するが、それは既に外敵や人間を歯牙にもかけないほどに強くなってしまった固体であり、決して人間に友好的になつたのではない。

だがこの飛竜は明らかに我々に対して明らかに友好的に接してきた。しかもそれは本能や習性によるものでも無く人間と言う種族、その言語を理解するほど知性をもつての行動だ。

最初の遭遇の時は特に馬鹿げていた。フルフルなのにグラビモスのブレスの前に飛び込んできた。フルフルの特性と習性を知っていればこれがどれだけ異常なことか直ぐに解る。

巢の中で目が覚めた時もその巢の中に広がっていた光景に驚かされた。飛竜が作り上げたとは思えない、だが人間に作り上げられるとも思えない程の幻想的な美しさを持つ竜の巢がそこに在った。

巢の至る所に使われている模様の彫り込まれたクリスタル、通路の隅を流れる僅かな傾斜を付けられた水路、美しさの中に高い知性とそれを可能にする技術力が見て取れた。

その巢にある美しき物、貴重な物に目を奪われ巢の中を探索していた時に、それよりも明らかに異常と言える物を私は見付けた。

それは整然と並べられた二十個程の墓だった。その墓に彫り込まれた文字や傍に置かれていた遺品から、その墓が最近この沼地の付近で行方不明になつた一部の人間の物だと分かった。

そして僕は墓の置かれていた部屋の清廉さに一番心が込められていると感じた。

その後新種の苔を見付け少し暴走してしまつたが、これは竜には関係ないので省略する。途中で年の所為か眠つてしまつたしね。

眠りから目覚めた僕は周囲の変化に驚いた。フルフルの巢の中で眠つた筈なのに何時の間にか村の中にいて荷台の上で寝ていたようだ。周囲の状況を観察し、今何が起きているのかを理解しようとした。その時だ。そのフルフルの本当におかしな所が分かつたのは。それは僕にしか分からなくて。フルフルも自分がそこまでおかしなことになっていることは自覚していなかつただろう。

小さいながらも強力なそのフルフルはとても怯えていたんだ、人間に嫌われる事に。

それはそれは飛竜としてもモンスターとしても異常で、昔の僕なら興味深いと思つて研究したいと思つただけだつたらう。でもそこで僕は研究者としては駄目な考えが思い浮かんだ。

昔と違い僕は歳を取つてしまつた、今では僕に可愛い孫が二人もいる二人は本当に可愛い自慢の孫だ。

だが上の孫は可愛いだけでなく天才だつた。それは自分の孫だからだと言ふ鼻屑目ではなく、リルは本当にずば抜けすぎた天才だつた。一歳で完璧に言葉を解し、四歳の今では息子夫婦の研究や僕の研究の手伝いまでするほどの天才だ。僕達は大変喜んでリルを天才だ。女神の祝福を受けた子だと褒めた。しかしよくある事で異常なりルは周囲の人々に気味悪がられた、そしてリルは賢く優しい子だつた。表に出さなくても気味悪がられている事を察知し、やがて周囲に迷惑をかけないように自分から閉じていき、僕達が気付いた時には笑顔を見せてくれなくなつた。だからなのだろうか？そのあまりにも異常で、おかしくて、強くて、優しい、人間に嫌われる事を恐れるフルフルに対して、リルと仲良くなつてくれそうと思つてしまうのは。そしてコイツがこの村に居られる様にしてあげたい思うのは。



だからだろうか？コイツにリフルと名付けてしまったのは。だからだろうか？リルモリフルも同じように自分の心を騙して生きているように見えるのは。

僕は歳を取ってしまった、そんな僕には正しい判断ができて居ないのかもしれない。だけれどもこの判断はいつかこの一人と一匹の為になりその間に絆を作ってくれるだろう。それは研究者としては面白い事とは言えないが、一人の孫の祖父としては素晴らしいことになるだろう。そうなる事を僕は願う。

閑話〱ルアールさんの心情〱（後書き）

一人称で主人公が嘔吐きだと心の奥深くがそのままだと描写しにくい。これはどうしたらいいんだろうか？今回のように第三者に視点変更するべきか、後書きでちよくちよく主人公の内心をネタバレしていくか。個人的には視点変更が好きなんですけど読者の皆様方はどう思いますか？是非お暇でしたら感想に書いてみてください。指摘もお待ちしています。

裏設定 主人公は現在、気合で体をピンク、赤、白に変えられる。  
これは週一の人間になれと念じる時に会得した。

### 十三話くよう、よく

ルアールさんの後を着いていき俺は村の奥の方、民家や農場などがある所へと歩いて行く。

そしてなんか二人きりになった途端ルアールさんのマッドな雰囲気  
が鳴りを潜め、物静かな最初の頃のルアールさんの雰囲気に戻った  
気がする。と言うより学者から単なる普通の優しげなおじさん見た  
いな雰囲気になった。

……何故だ？急にそこまで態度変えるようなことがあっただろうか  
？ルアールさんは寝ていたからミナさんやツキカちゃんとは違って俺  
との関わりも少ないはずなのに、直接的な意思疎通もしてないぞ。

だから、そんな生暖かい視線で見るとは、他の人が見たら勘  
違いするかもしれんぞ。アッー！的な方向に。

しかしルアールさんの演説のおかげでとりあえずは危機は免れたけ  
ど今後は大丈夫だろうか？何気にルアールさんのあの演説で納得し  
てる人もいたけど、やはりモンスターだからこれからも警戒はされ  
るだろう。ここはルアールさんの余計なことしたらそいつにナニカ  
スルゾと言っていたマッド性に賭けておくしかないか。

とりあえず最低三日はこの村を満喫しよう、そのあとは一旦巢に帰  
って見る事にしようかなとつらつらと大事な事やどうでもいい事、  
くだらない事を考えていると。

「もうちょっと気楽にしていたほうがいいよ。僕は沼地の生き物が  
大好きだからね、襲わない限りは嫌わないよ」

前を歩いていたルアールさんがこんな事を言った。

思わぬことをいきなり言われて思考が停止した。

前を歩く彼は続けて言う。

「何故かはそうなっているかは分からないが、君は賢いだけではなく人間に非常に近い考え方を持っているのは分った。つまり君は人と一緒に居たいんだろ？」

歩きながら彼は俺に話しかけ続ける。……合ってるけど急に言われるとどう反応していいか分からん。

「なら此処に来た事は君にとってなかなか運がいい。ちょっと寄り道するけどいいかい」

……いきなり話しが飛んでないか？それと寄り道ってどこ？まあ良いけどな。

ルアールさんが近くの家に向かって歩いていくと、彼が家の前に来た所でその家の扉が開いた。

「お帰りなさい、お祖父ちゃん。今回はそのフルフルがお土産？」

扉の奥から出てきたのは、サラフワなプラチナブロンドのにサファイアのように美しい瞳の美しい幼女でした。

……て、ちょっと待て。お帰りなさい、お祖父ちゃんということはこれがルアールさんのお孫さんですか？見た目では全然分からん全く似てないぞ、嗅覚では分かるがそれも薬品の匂いとかが強くて何とか分かる程度だ。

「詳しく説明するのはやめておくが。まあ似たような物だね」

「……そう」

説明はやめておくのか！？そして今更ながら俺に全然驚いてないと

かどういふ事なの……あとフルフルをお土産扱いとかこの幼女で  
きる。俺が驚愕していると幼女がこっちを見つめてきた。

「……………」

…よう、よ観察中…こっちをジッと見てらっしゃる。次に頭に  
手を伸ばしてきてそのまま撫でられた。

……幼女のやわらかいぶにぶにの手で撫でられています。正にヘブン  
状態な至福の時間だ。至福の時間なのだけれども第三者から見たら  
アウトじゃないか？フルフルの頭を撫でてる幼女なんて明らかに犯  
罪の香りしかない。しかもこの場合逮捕されるのは間違いなく俺  
になってしまう。

まさか俺をこのまま社会的に抹殺する気かと不安になっていると。  
幼女が口を開いた。

「目が見えて人間の言葉まで理解するほど賢いフルフルなんて、お  
祖父ちゃん凄いのを見つけてきたんだね」

なん……だと……何故分かった。しかも目が見えていることまで  
分かるとか何者!?

まさかこやつは伝説のうわよう、よつよい（頭脳的な意味で）な  
のか？と引き続き困惑していると。

幼女は続けて自己紹介をしてくれた。

「ボクの名前はリル・ディレアドレ。四歳だよ。これからよろしく  
ね」

ボクっ娘だと……声も柔らかい感じで正に地上に降りてきた天使そ  
のものみたいな子だ。

もう一度言つがこの子は本当にルアールさんの孫か？本当に見た目

は似てないな。それよりも四歳でこのしっかりした性格にはつきりとした喋り方。俺が四歳の時はこんな風じゃなかったぞ。

そして今更だが幼女に会わせてくれたのはいいが、ルアールさんは何をしようとに此処へ来たんだ？まさか幼女に会わせる為だけでもあるまいし。

「僕はこれからコイツと一緒に竜舎の所にまで行くんだが一緒に来てくれるかい」

「わかった。後エルは眠ったばかりだからお祖父ちゃんは会っちゃ駄目」

「そうかそれは残念だが仕方ないね。じゃあ行くこうか」

なるほど幼女を迎えに来たのですね、だが何の為だかさっぱり分かん。フルフルと幼女この組み合わせに一体何の秘密が……と悩んでいると幼女が俺の上に乗っかって来た。

「行け、シロシロ」

行けと言われたら行きますけど何で乗った？フルフルの上になんて乗った？

いや幼女のお尻の感触は布越しても最高に柔らかくて不満はないんだが。撫でられてる時より背徳度が増して、俺の寿命が罪悪感がマッハなんですけど。後シロシロが俺の新しい名前に追加された。

「ボクはまだ小さいから竜舎まで歩くのは疲れるから。だから乗らせてもらった」

その時俺に電流走る！この幼女俺の心を読みとりやがった。

「シロシロは気持ち表れづらいたいで隠してないから分かりやす

いんだよ」

「リルは僕よりも頭が良いからね。本当に自慢のかわいい孫だよ。ところでリル。僕もコイツにリフル・シウテクトリって名付けたんだけどコイツはどっちが良いって思ってるのかな？」

おじさんよりは幼女がつけた名前のほうがいいです。つまりシロシロのほうに俺は一票。

「シロシロはシロシロの方が良いんだって」

「……そうか。でもシロシロだけじゃ味気ないから僕の考えた名前を後ろに引っ付けておこうか」

「そうね。でもボクが呼ぶときはシロシロだから」

「そうだね。でも僕はリフルって呼ぶことにするよ」

……ルールさん意外とその名前に自信あったのね。ネーミングセンスないとかとりあえずとか言っておきながら未練たっぷりじゃないか。孫と張り合うなよ。ちなみにこの間リルちゃんは俺の上に乗って乗っています。

俺の名前に関する孫と祖父の争いがヒートアップしてきたので、喧嘩はやめましょうという意味を込めてちょっと一鳴きしてみる。ギヤオギヤオ。

「シロシロがやめろって言うんならボクはやめるよ。シロシロはこっちの方が良いって言ってきてるし」

「うん？そんな事を今言ったのかい？なら仕方ない。その内どっちの名前が本当に良いか分かるだろうしね」

最後までルールさんはこだわるなおとなしく負けを認める。俺は幼女の味方だ。

「では改めて皆で竜舎まで出発だ。行こうかりル」  
「行くぞシロシロ。安全運転で頼む」

幼女の癖に安全運転で頼むとか本当に四歳なのか？まあいい今度は了解の意味を込めて一鳴きすると、おれは言われた通り安全運転でリルちゃんを乗せながらルアールさんの後を付いて行った。

で、竜舎のある農場にまで到着しました。リルちゃんもやはり四歳なので上に乗るのに慣れた後は、上で意味も無く幼女仁王立ちしてました。此処に来るまでの間で俺は何故背中には目が無いんだと自問自答していた。なぜならこの時リルちゃんは赤と白の可愛いスカートをはいてたからです。

背中に目がないフルフルの生態に俺が後悔していると幼女が背中から降りた。降りる時に風の抵抗で捲くれ上がったスカートから白い太もが見えたが、その奥は見えなかった……まさか幼女による絶対領域である。できるな。

「じゃあ少し説明するね、この農場にあるものは大概自由にしている。ただしアプトノスや人間は食べてはいけない。まあ君なら大体分かるだろうけどね。詳しい事はリルに聞いてくれれば分かるよ」  
「困った時はボクに聞いてね、でもエルがいるときは静かにしてね」  
ルアールさんのは説明になるのか？後リルちゃんエルってだーれ？  
「エルはボクの弟でまだ一歳だから、ボクも時々お世話してあげているんだよ」

なるほど納得、てかりルちゃんは気持ち察するレベルを超えてる気がするんだが。

「気にしない気にしない」



そうか、じゃあ気にしないわ。

「じゃあ僕は沼地の毒の研究をしておくから、リルはリフルの相手をしておいてくれないか」

「分かった。シロシロの相手ならボクはしておくよ」

まだ張り合ってるよこの二人、ルアルルさんも譲れよ。

「お祖父ちゃんとボクは似てるからね。こうなると長くなるんだよ」  
さよけ。分かり合っているなら別にいいよ。

俺とリルちゃんは農場に残り、毒の研究をし戻っていくルアルルさん見送った。

ところでルアルルさんは何をしたくてリルちゃんと俺を会わせただろう？

「お祖父ちゃんの事だから、君とボクを仲良くさせたいんじゃない？」

マジで!?

「たぶんね」

十三話くよう、よく（後書き）

天才よう、よ参上！ やったね！これで会話ができるよ。

アイルーを介さなくても会話できるのはこのよう、よの他に数人  
出す予定。

裏設定

リルちゃんがちょっと異端視された為、ルアールさん一家はこの村  
に来た。ミナさんはルアールさんの生徒。

## 十四話　ベットの下の輪郭のある平面な物体

ルアールさんも居なくなつたので、幼女と二人きりでキャツキャウフフのイチャラブ状態！

になると思つたんだけどな。リルちゃんは職務に忠実なしっかり者であつたようだ。ルアールさんが適当に終わらせたこの村に居る上での守るべきルールの説明をきちんと補足してくれるようです。という訳で始まりました、リルちゃんのこの村での過ごし方講座を守らないと村八分D A Z O の時間です。

「この村に居る為のルールをシロシロに教えてあげる」  
よしい、シロシロは準備万全だぜ！

- 1．アプトノスは村の商品であり食料だから食べちゃ駄目。
- 2．農場にある物は大体自由にしていいが、畑を荒らしたり魚を乱獲したり木を勝手に切ったりは駄目。
- 3．村の中で無闇に吼えてはいけない、ブレスも吐いてはいけない。人間も食べちゃ駄目。
- 4．村の建造物を勝手に壊してはいけない、建て替え、リフォームも駄目。
- 5．困つた時はボクかお祖父ちゃんを呼びなさい。
- 6．農場の隅にお祖父ちゃんの畑は本当に自由にしている。

「これくらい守れば、きつと大丈夫」

了解だ！後この村から外に出たい時はどうすればいいの？

「普通に飛べばいいんじゃない？門から出たいならボクが付いていく」

……感動した。ここまでリルちゃんが俺との会話がスムーズにできるなんて。  
アイルーに通訳してもらおうのもいいけど、やっぱり普通に会話できる方がいいに決まってる。

でもこの世界に産まれたならアイルーの可愛さを味あわなきゃ損だ！  
！二足歩行のぬこをもふもふするんだ！  
てな訳で。

Q・アイルーはどこ？

A・シロシロが怖くて逃げた

……泣いた。

ぬこが逃げた事その原因が自分の所為だと告げられた事で、俺は給食のお気に入りのデザートをこぼしたあの時、前世の小学二年のあの日に匹敵するほどの悲しみを味わった。

とぐるを巻いて自らの心の内でその悲しみに浸りぬこと何度も心の中で呟いていたが、リルちゃんに背中を慰めるように撫でられたり、ボクがいるよと励まされたりしてそのおかげで立ち直ることができた。

相変わらず性能の高い幼女だな……世界中の飲み屋に出没する伝説の妖怪？励ましおっさん並の慰め励ましスキルの高さだった。思わずおやつさんと抱きついてしまったのは仕方ない。しかも抱きついた事まで許してくれた何て心の広い幼女だ。思わず今度は両翼を揃えて拝んだら「ボクを拝んだって意味がないよ自分を信じたほうがいい」と言われた。なにこの幼女……ステキ／／／

リルちゃんに慰められ（一応言っておこう性的な意味ではない）現世へ戻る事ができたので、今はリルちゃんによる農場紹介の時間に

入っている。先を行くリルちゃんの後をてくてく付いて行く。のんびり歩いていくとリルちゃんが農場の奥にある水場の近くで止まった。

「ここは池。元から在った水場を広げた後、川から水を引いたりして出来た所。奥の方はかなり深くて地下水脈と繋がってるかも。水浴びしてもいいけど魚を取ったりするから電撃は禁止。糞尿で汚すのも駄目」

しないよ！自分は紳士だからそこら辺に撒き散らさないよ！あと女の子は糞尿とか言うのに恥じらい持ちなさい！

「分かってるけど一応。あとこれが一番短い、そして恥じらいなら持つてるから大丈夫」

あの普通に糞尿と何のためらいもなく言った姿からは、恥じらいなんて全く感じられなかったんだが。

いったいお前の何処に恥じらいがあるのやらと思っていると、リルちゃんはおもむろに上着に手をかけるとそのまま脱いだ。そしてさも当たり前と言った顔のままスカートも脱いだ。その結果リルちゃんは下着姿になった。

………??? 一体何事？下着姿になったリルちゃんの姿は幼女特有のやわらかくてすべすべしてそうな白い肌で下着は色気のないものだけど明らかに増えた肌の露出で背徳度上昇して少しの下着のずれが謎の色気で悟りを開いた人でもロリコンに堕ちそうな魅力でロリでつるぺた警察が来いで病院が病気で本当に一体何事！？

前世どこるか来世まで含めてもここまで混乱する事はないくらいに混乱している俺を尻目に、リルちゃんは次の行動へと移った。具体的には下着のずれを調整しギリギリにして、見えそつで見えない部分を自分の腕で隠し、周知に耐え切れないという表情のまま上目遣いでこちらを見つめ。本当に恥ずかしそつに「………そんなに見ない

「でください、恥ずかしいです」と言った。

呆気にとられる俺を放置し暫くそのポーズをした後リルちゃんは、  
ずらした下着を整えた後脱いだテキパキと服を着ていった。全て着  
終わったリルちゃんは心なしかドヤ顔風の表情で。

「これがボクの恥じらいだよ」

と言った。

……つちつがああああああうう！それは恥じらいなんかじゃな  
い！思わずペドに墮ちそうになったけど、それは絶対に完全に完璧  
100%究極的に乙女の恥じらいなんかではない！断言できる。

「でも書物にはこれが恥じらいでこれに男性は興奮するって記され  
てた。もちろん大人の女性がやれば、だけど」

それ書物って言うてるけど完全にエロ本だよ！

「違うよ。お祖父ちゃんの昔の日記」

それは予想外だよ！ルアールさんあんたなんて物を残してるんだよ  
！そんなもの読ませるな！

「たぶんお祖父ちゃんにも予想外でまだ気付いてない。特殊インク  
と暗号で書かれていたから忘れてるかも」

無駄に高度な黒歴史をのこしてるなルアールさんは！そしてそんな  
もの解読するな！

「ボクはお祖父ちゃんの血を引いて好奇心が強いからね」

……疲れた。この世界に産まれて一番疲れた。パ○ラッシュなんだ  
かとっても眠いんだって言ったネ 君の気持ちの二分の一、今な  
ら分かる気がする疲れて疲れて体から力が抜けてゆく気がする。リ  
ルちゃんが次のところへ行こうとか言ってるけどもういいよ。説明  
されなくても大体分かるから。

「なら仕方ない。ここから見える範囲だけでも説明する。あつちに在る柵に囲まれた部分が畑。食料やこの村の特産品になりそうな数種類の植物を試験的に育ててる場所だから荒らしちゃ駄目。薬草や薬の材料になるものはお祖父ちゃんの畑で育てている。あそこの建物が竜舎。アプトノスが居るから仲良くするように、もちろん食べちゃ駄目。それから、ここらへんの草はアプトノスの餌にもなるから焼き払っちゃ駄目。シロシロが寝るところは竜舎の一番奥だけど、ボクは君の寝たいところで寝てもいいと思う」

以上。と最後に言っただけで彼女は説明を終えた。

ほいなー。と俺は心の中で返事をしたこれで通じるなんて便利だな。

この後はリルちゃんと一緒にのんびりしときたいな

「それはいいね。ついでに今更だけどちゃん付けはやめてね」  
「ありゃ？ちゃん付けは嫌い？可愛いのに。」

「キミとボクとは1歳位しか変わらないからだよ」  
だから何故分かる！？

リルと二人きりでキャツキャウフフのイチャラブ状態！ではなく二人で草原に転がってお昼寝タイム。

俺はリルの枕代わりになってます。フルフル特有の冷たくしつとり柔らかの独特の触り心地が気持ち良いんだってさ。つまり人間……じゃなくて生体アイスノンだ。幼女と一緒に昼寝するだけの簡単なお仕事です。でも冬場になったらお払い箱になってしまうかもしれないな。

……いやフルフルと言えば電気だ。何とか頑張れば電気カイロの真似事ができるかも知れん。流石電気之力、現代社会に欠かせないだけあって活用法がいろいろあって便利だな。「きた！」「発電機きた！」「メイン電力きた！」「これで勝つる！」と賞賛される日も近

いかな。

「それはない」

「よわっ！？いきなり俺の思考まで読み取るな！変な声出たじゃないか。」

「途中から気持ちがいっつきり外に出た。それにしても突然の出来事にも鳴かずに、心の声だけのリアクションだなんて器用だねシロシロは」

「なにそれ褒めてるの？照れるね。」

「賢いのに馬鹿だねシロシロは」

「リルちゃん非道い！」

「ちゃん付けは禁止」

ぺしつと小さな手で叩かれた。我々の業界ではご褒美です。

いや冗談だけどね自分ではMではなくSだと思っているから。責められて喜ぶとかないわ。

「Sと自称する人ほど本当はMに近いらしいよ」

だからなんで四歳がそういうことを知ってるの！？耳年増にも程があるよ。

「好奇心強いから」

好奇心では済まされない事もあるんだよ。で今度は一体何処から？

「お父さんの本棚の上の板の中にあつた本」

父親エ……

こんなくだらなくて楽しくなんて事はない普通の会話を続ける。

俺とリルは寝転がって太陽の光と爽やかな風を浴びながらそれを楽しんだ。

頬を撫でるような柔らかい風、さらさらと揺れる草の音、緩やかに



暖めてくれる陽の光に囲まれてゆったりと話し続けていたら、いつの間にかリルは眠っていた。コイツは本当に可愛いが寝てる時は更に可愛いな、年相応と言うか素の顔と言うかとにかく可愛いな。口もふにやっとしてるし起きてる時はキリッとしてるんだよ四歳の少女が。まあそれはそれでいいんだけどね。

こんなふにやけた可愛い寝顔見るとなんだか眠たくなるよね。見ていたいんだけど眠たくなる魔性の寝顔だねこれは。まあこの環境で寝ないほうがおかしいから俺もおやすみ。

十四話〜ベットの下の輪郭のある平面な物体〜（後書き）

謎のタイトルの正体とは。

エロ本ですか？いいえ、ケフィアです。

.....

まあエロ本の事なんですけどね。ケフィアでもプルケでもありません。

と言う訳で引き続き幼女回です。幼女の会話が長くて、予定のヤツまで入れたら長くなってしまうので寝オチで切りました。違和感あるよね。

勢いで書いてある本作ですが幼女の所だけは異常に筆が乗る。まさか俺はロリコンだったのか……そんな自分に愕然としたこの話でし  
たまる。

……最初はツキカちゃん押しだったんだけどなー。

PS・MHで闘技場で捕獲したモンスター同士を闘わせることができたのはFでしたっけ？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5443w/>

---

雷纏う竜（MH転生）

2011年10月20日02時13分発行